

# 八世紀における錢貨機能論

黒田 洋子

## はじめに

八世紀の錢貨については、既に従来の研究の中で歴史的特質を究める上での数多くの重要な指摘がなされている。青木和夫氏は、政府当局者が交換經濟の中で錢貨を初めて投入する際、錢貨鑄造の低廉性に対し任意の価値を付すことで得られる財政的有益性について指摘された<sup>(1)</sup>。この様な律令國家の財政面から錢貨をとらえる観点においては、近年榮原永遠男氏によって新錢発行と造營事業とが史料的に関連付けられ、巨額の功直が國家財政を圧迫することに対し錢貨が支払い手段として意図された<sup>(2)</sup>。一方、同じく國家財政との關係を中心としつつも律令國家のおかれた当時の經濟の特殊性との関連から錢貨をとらえる研究方向としては門脇禎二氏が、錢貨とは律令國家の一方的支払い手段であるとともに調衡錢等の貢納物の一つとして機能したのであり、商品交換を前提にした貨幣經濟の錢貨と見誤ってはならないことを強調された<sup>(3)</sup>。これに対し鬼頭清明氏は律令國家の根幹である「実物貢納經濟」の限界を補う為に錢貨が必

要とされたことを述べられ、将来的展望をもつものではなかったにせよ、本来的貨幣と近似した運動を展開する流通經濟の、相対的に自立した局面の存在を無視することはできないとされた<sup>(4)</sup>。

いずれも重要な指摘であり、今後八世紀の錢貨を研究していく上で十分にふまえておく必要がある。ただ、鬼頭氏を除けば、諸先学の研究においては國家の支払い手段として用いられた点に論点があり、それが錢貨の歴史的特質として意義付けられている。八世紀における錢貨は門脇氏の言われるとおり、もとより商品交換を前提とした貨幣經濟ではない。その為、律令國家によって発行された錢貨の貨幣としての機能を流通經濟の中で見究めようとするには特に慎重を期さなければならない。しかしひとたび錢貨として世に放出され、交易に用いられたのであれば、財政上果した國家の支払い手段としての歴史的意義の他に、貨幣としての機能の意義も認められないであらうか。

本論ではこの様な問題意識にたつて八世紀の錢貨のもつ独自の機能を現象面から分析し、錢貨の担った役割を探って行きたいと思う（なお、『大日本古文書』編年文書における所在は、1—100の如く略記する）。

## 第一章 錢貨の役割について

貨幣の果す機能については、一般的支払い手段、価値の尺度、価値の保藏手段、価値の移転手段等の他様々な機能が挙げられる。又これらの諸機能のうちには他の機能に基づいて二次的に引き出されるという関係のものもある。つまり貨幣の機能の中には本源的機能とそこから派生的に生じてくる機能とがあるのであり、それらのうちで何が最も本源的な機能であるかを求めることがその貨幣を正しく見究める為の、必要不可欠な作業となる<sup>(5)</sup>。

特に資本制経済が営まれる以前における貨幣は厳密な意味での貨幣（本来的貨幣）<sup>(6)</sup>——即ち自らの価値によって他の商品の価値尺度となり、それに付与される価格を通じて価格規準となる機能を同時に営む本位貨幣——に昇華し切っておらず、そこでは貨幣の営む諸機能を一つ一つ具体的に検討し、いかなる機能をもつ点でその時代にその貨幣が有用であったかを明らかにする必要がある<sup>(7)</sup>。特に日本古代においては錢貨に限らず「物品貨幣」と呼ばれるものもいくつか指摘されているのであるから、本論のように八世紀の錢貨を主題にして論じその機能を明らかにして歴史的に特徴付ける為には、それら全体の諸機能を検討することが必須となってくる。残念ながらここではそれら全てを論じている余裕はない。そこで本章ではまず、現物品目と錢貨の、価値の構造的連関を財政運営のなかで分析し、そこから錢貨の役割、特に本来的機能について明らかにしていきたい。

### （一）写経所における財源運用

写経所の予算システムについては既に吉田孝氏等によって詳細に述べられているのでここでは簡単に述べると、写経事業に必要な諸品目は写経用紙、経生等の浄衣、食料等全て現物で支給される建前であり、筆・墨、生菜等の限られた品目についてのみ代価として錢貨で支給される以外は、原則的には、写経所独自に必要な品目を取り揃えなければならないのは全予算額のうちのほんの一部分に過ぎなかった。ところが、全ての写経事業が現物支給の原則通りに支給を受けた訳ではなく、この原則が全く崩れてしまった特殊な例もあるのである。その様な事業例における財政の在り方にこそ現物支給の原則にかなった通常の写経所財政では見ることのできない流通交易体系への依存・関与の方法が見られるのである。その様な特別な例として、天平十七年から十八年にかけての難波之時御願大般若経（以下難波大般若経と略称する）書写と、天平宝字六年十二月から翌年の初めにかけて行われた二部大般若経書写の二つが挙げられる。この二つの写経事業は書写命令の宣を受け、即日必要諸品目の申請を行うが、実際には通例の如く申請諸品目が支給されて来なかった。その為に写経所独自で流通交易に依存し必要品目を取り揃える作業が必要となったのである。

難波大般若経の場合には、「用度物」として、紙一万二千六百二十張 絶一千匹、綿一千屯、米四十九斛一斗二升、塩一斛五斗五升八合八勺の五品目を受けた（10—304）。このうち絶一百匹、綿六百三十屯から錢百五十三貫二百文を獲得し、必要品目購入等の運営費に当てたことがわか

二代目人物による金貨回収状況

A:壳料綿下帳 (16:74-78)

B: 壳料綿并用度錢下帳 (16:78-87)

[A]

※ 銭貨収納日・額は雑物納帳(5:300-302, 302-306, 16:121-129)を参照した。\*は雑物納帳(16:71-73)によるが、収納日は不明。

| 帳簿  | 日付    | 日別割当品目          | 内 訳                          | 担 当 者   | 銭 貨 収 納 額   |
|-----|-------|-----------------|------------------------------|---|---|
| [B] | 12. 6 | 綿 10屯           | 綿 10屯                        | 土師名道 史生   | 600文(60×10) 見直来   |
|     | 12. 7 | 綿 60屯           | 綿 60屯                        | 志貴万呂所 知別当   | 3貫900文(65×60) 未来直   |
|     | 12. 8 | 綿 45屯           | 綿 20屯<br>5屯                  | 高井判官所 付日置庭<br>買 文部史生下付<br>買 美濃主典 付吉万呂               | 1貫200文(60×20) 見来<br>300文(60×5) 見来120文 未180文<br>1貫300文(65×20) 見直来            |
|     | 12. 9 | 綿 233屯<br>辛櫃 1合 | 綿 10屯<br>3屯<br>220屯<br>辛櫃 1合 | 阿刀史生<br>少領 三郎<br>買 道主                               | 600文(60×10) 見直来<br>180文(60×3) 見直来<br>13貫200文(60×220) 見来<br>170文 見来151文 残19文 |
|     | 12.10 | 綿 200屯          | 綿 200屯                       | 付 漆部收人  | ? 且来10貫   |
|     | 12.11 | 綿 13屯           | 綿 10屯<br>3屯                  | 買 美濃主(典)所<br>付 衣比 知道守<br>買 道守                       | 600文(60×10) 直未<br>180文(60×3) 見来   |
|     | 12.12 | 綿 13屯           | 綿 13屯                        | 買 高井判官所<br>附 調告万呂                                   | 780文(60×13) 見直来   |
|     | 12.13 | 綿 400屯<br>租布 2段 | 綿 200屯<br>200屯<br>租布 2段      | 買 荆嶋足呂<br>買 下太万呂<br>買 下太万呂                          | 13貫(65×200) 見直来<br>12貫800文(64×200) 見直来<br>280文(140×2) 見直来                   |
|     | 12.15 | 綿 2屯            | 綿 2屯                         | 買 乙成  | 130文(65×2) 見直来  |
|     | 12.17 | 綿 104屯          | 綿 100屯<br>4屯                 | 買 常世公 知道守<br>買 阿刀主典所<br>付 門守 知嶋万呂                   | 6貫500文(65×100) 見買来<br>240文(60×4) 見直来  |
|     | 12.19 | 綿 51屯<br>租布 1段  | 綿 1屯<br>20屯<br>1段<br>30屯     | 買 上毛大夫 三嶋船長<br>買 内史局佐官高橋藏<br>附 漆部收人 附 嶋部小虫<br>判官御曹司 | 60文(60×1) 買見来<br>1貫200文(60×20) 直未来<br>?                                     |
|     | 12.20 | 綿 21屯           | 綿 20屯<br>1屯                  | 買 阿刀主典 付 從<br>付 兼中国 知別当                             | 1貫200文(60×20) 直未<br>?   |

るが、それ以上は難波大般若經の例については史料がないために詳細を知り得ない。一方、同様の例である二部大般若經の財政過程については主として写経事業の前半期間についてのみではあるが、財政運用を知るうえでの手掛かりとなる帳簿類が一部残っているもので、財源として支給された代価物の行方を追うことができる。以下、二部大般若經の財政に即して財源運用の過程の考察を試みたい。<sup>(9)</sup>

二部大般若經書写事業は、天平宝字六年十二月十六日に少僧都慈訓の宣により書写命令が下されたことによって開始された(16―382)。まず通例通りの必要品目の予算見積もりとして用度申請解が即日提出された。(16―59)。これに対し翌十二月十七日に安都雄足が写経所の案主等に伝えた解によると、翌十八日に写経所案主の上馬養が雜使・役夫等を伴って節部省(大蔵省)まで「用度物」を取りに行くようにとある(16―69)。この「用度物」とは、翌十九日から記載が始まる「二部般若雜物納帳」(5―300)によると、調綿一万九百九十七屯、それを包んだ租布五十五段、入れ物の白木辛櫃十合であった。又、十二月三十日にも「奉写二部大般若料」として節部省から綿五千四十三屯、辛櫃二十五合、租布二十五段を収納しており(5―305)、これら二度にわたって収納した調綿とそれに付随する租布・辛櫃が二部大般若經書写事業の為に節部省から下された「用度物」の全てであり、これによって事業運営が賄われることになった。<sup>(10)</sup> 写経所ではまず、「用度物」として支給された調綿等の物品を全て銭貨に交換する作業が行われた。その過程を記した帳簿に十二月二十日から閏十二月十一日までの期間を記した「売料綿下帳」[A]と、閏十二月六日以降、売料綿の頒下量と銭用額を一つに記した「売料綿并

用度錢下帳」「B」があり、代価物として収納された調綿等が漸次写経所の官人等に引き受けられて錢貨に換えられていく様子を知ることができ、その様子を表にしたのが表2である。又、調綿等を頒下された官人等が錢貨を収納した時点について「A」帳、「B」帳、「二部般若雜物納帳」等からわかる限り引き出して併せて表2に記した。以下これから、調綿から錢貨へ交換されていく過程について問題点を指摘してみた。

まず、そこでは榮原論文で指摘される様に節部省から支給された調綿の官人等への割り当てが、わずか十三日間<sup>(12)</sup>という短期間に極めて迅速に行われ、又、それに対する錢貨の回収も閏十二月五日までに約七割に達していることからわかる様に、調綿から錢貨への交換が非常に急がれている。これは、写経事業の「用度物」として支給された調綿が、事業運営上必要品目を購入して取り揃える為には、錢貨へ交換することを前提として受け取られた代価物であったことを意味するのであり、調綿その他の現物のままで必要物資購入等の財政運用に充てられることはない<sup>(14)</sup>のである。又、この点では先に触れた難波大般若經の場合にも同様に、代価物として支給された純や綿を錢貨に交換する作業が行われている。このことは、言い換えれば代価物として写経所に支給された調綿等はあくまで代価たる財源でしかありえないのであり、購入の為にはそれが可能な錢貨に交換する必要があったのである。さて、次にこの様にあくまで財源でしかない調綿その他の現物から、錢貨へ交換される様子を具体的に見てみたい。

ここで、取引されている綿の価格について見てみると、一屯あたり六

十文というのが圧倒的に多い。そのような中で六十五文以上の高値で交換している人物のなかには杜下月足・弓削佰万呂ら難波交易使の存在が知られる。彼らに対しては写経所から細かい指図を示した符が送られており<sup>(15)</sup>、価格に関しても六十五文以上で売却するよう指定されている。京外の畿内周辺における交易に依拠すれば高値で現物を売却することが可能であったかもしれない。しかし、それは「A」帳の十二月二十三日条の杜下月足・弓削佰万呂に頒下された調綿一千屯の条を見ても一千屯のうち二五三屯、つまり四分の一しか売却できておらず残りの四分の三を返上していることからかなり困難であったと思われる、その為か収納日までの日数も要しているのである<sup>(16)</sup>。

難波交易使以外で六十五文以上の高値で取引をした人物達、とりわけ上馬甘・下道主らがどのような方法に拠ったかは不明である。ただ、付与された量が多いこと、収納までの日数が比較的低かったことなど、難波交易使と共通する点で、畿内周辺での交易に拠った可能性も考えられる。

では、難波交易使又はそれに準ずる可能性があると考えられる人々に比べ、対照的に① 換算率が一律六十文であること、② 収納日までの日数を要していない、③ 付与された綿の量が少ない、などの特徴が見いだせる人々はいかなる方法に拠っているであろうか。

そこでもう一度「A」帳、「B」帳の綿の担当者の記載を見ると、「A」帳では「附◎◎」又は「附◎◎付◇◇」とある。「A」帳の記載を見た限りではそこに記された官人等が具体的にどの様な役割を果たしたのか解しかねる。そこで、「A」帳とは若干記載方針の異なる「B」帳

を見ると、「買◎◎」或は「買◎◎付◇」とある。とすると「B」帳の「買」の文字の下に記された人物は実際に綿を「買」取り、銭貨と交換した人物であると考えられ、その下に「附◎◎」と記された人物は「買」取った人物のもとまで品々を運び、それと引き換えに支払われた銭貨を写経所へ収納するという、媒介役を任務とした人物であると考えられる。このような「B」帳の記載の在り方からすると、それとは若干記載方針に違いの見られる「A」帳においては「B」帳のように実際に綿を買い取り、銭貨を支払った人物を担当者として記すのではなく、写経所と買い取った人物の間を行き来し、媒介して銭貨を写経所に直接収納した責任者が担当者として記載されたのである。時おり見られる「附◎◎付◇」と言う記載は両者を記したものであろう。また、綿の担当者として記された人物を見ると、葛井判官・美濃主典等、<sup>(18)</sup>造東大寺司四等官クラスの官人または造東大寺司になんらかの関係があった官人と、写経所の雑使とが見え、明らかに身分が二分する点でも、両者の役割の相違を裏付けるものである。<sup>(19)</sup>

以上、「A」帳からのみでは「附◎◎」と記された人物がどのような働きをしたものなのか不明確であったが、「B」帳と比較して考えてみた場合、以上のような過程がそこに見いだされるのである。

本節では、写経所において現物財源から銭貨へと交換される様相について述べてみたが、ここでは京外の周辺地域に於ける綿から銭貨への交換すなわち売却は、うまくすれば高値を見込むことが可能であったが、いわばかけであり、実際には非常に困難であったことが窺われるのである。一部分に限られていた。それ以外の大部分においては、造東大寺司

の官人或はなんらかの関係があったと思われる官人等による個別買い取り方式によって現物財源が銭貨に換えられていったのである。

この様に銭貨の回収が一部を除いて、流通体系に関与せずにおこなわれていることは興味深い。<sup>(20)</sup>

## (二) 造営事業における財源運用

(一) では二部大般若經書写事業の例に即して考察を行ったが、この場合にはあくまで現物支給原則に対し、臨時的にとられた措置であった。では次に巨額な功直銭支給その他の支払いの為に、最初から大量の銭貨経費が予定される様な事業財政の場合には、銭貨がどのようにして準備されているかを見てみたい。

天平宝字三年から翌四年にかけて行われた法華寺阿弥陀浄土院金堂の造営に関する史料は福山敏男氏によって整理復原されている。<sup>(21)</sup> そのうち「造金堂所解」は造営に費やした各品目毎に収納総額と用途についてまとめた、造営経費に関する総決算報告書である。何分にも前半部分しか残されていない為に造営経費の全体像を知ることができず、又この「造金堂所解」以外に金堂造営の財政に関する史料が全く見つからない為に、手掛かりは希薄でしかないのであるが、それでも「造金堂所解」の冒頭は銭貨項目であり、一応欠落がないと思われるので造営に関する銭貨の収納・用途支出に関しては若干なりとも考察の余地が残されている。以下金堂造営における銭貨の収納状況について、この「造金堂所解」をもとに考察して行きたい。

「造金堂所解」によると造営経費に於ける銭貨収支の総額は一五四九

表5 法華寺金堂造営における月別財源収納状況  
(「造金堂所解」より作成)

| 銭 貨    |          |          | 現 物    |             |          |
|--------|----------|----------|--------|-------------|----------|
| 収納年月日  | 収 納 額    | 出 所      | 収納年月日  | 収 納 額       | 出 所      |
| 天平宝字 3 |          |          | 5. 12  | 綿 100匹      | 東花園      |
| 5. 13  | 15貫      | 東板屋厚見采女  | "      | 調布 100端     | "        |
| 6. 7   | 1貫       |          | "      | 綿 200屯      | "        |
| 6. 18  | 9貫       | 内裏       | 5. 13  | 綿 44屯       | 安殿西院尼師所  |
| 7. 7   | 12貫      | "        | "      | 調布 83端      | "        |
| 8. 1   | 110貫800文 | 内裏       | 7. 11  | 糸 20斤       | 内裏       |
| 8. 25  | 100貫     | 池辺御倉     | 7. 16  | 綿 10匹       | 貞戒尼師所    |
| 9. 2   | 2貫700文   | 内裏       | "      | 糸 100斤      | "        |
| "      | 11貫      | 院中(信福尼師) | 8. 15  | 綿 12匹       | 内裏       |
| 9. 10  | 1貫640文   | 寺御息所     | "      | 調布 90屯      | "        |
| "      | 1貫       | 大野内侍     | "      | 綿 3端        | "        |
| 10. 1  | 222文     | 院中(貞戒尼師) | 9. 10  | 綿 2匹        | 大野内侍     |
| "      | 1貫       | 花梅尼師     | "      | 調布 120屯     | 法花寺      |
| "      | 1貫       | 信福尼師     | "      | 綿 2端        | 阿刀内侍     |
| 10. 22 | 100貫     | 葛木大夫     | "      | 綿 4屯        | (寺御息所)   |
| 11. 10 | 100貫     | "        | 9. 17  | 綿 4匹        | 法花寺      |
| 12. 17 | 100貫     | "        | "      | 綿 7屯        | 法花寺      |
|        |          |          | 10. 1  | 糸 200斤      | 内裏       |
|        |          |          | "      | 租交易布100段    | 院中       |
|        |          |          | 10. 4  | 租交易布100段    | 権尼師所     |
|        |          |          | 10. 12 | 租交易布 13段    | 院中       |
|        |          |          | 12. 29 | 綿 3丈        | 内裏       |
|        |          |          | 3年中    | 綿 350匹      | 封戸       |
|        |          |          | "      | 糸465斤2兩1分1朱 | 封戸       |
|        |          |          | "      | 綿 680屯      | 封戸       |
|        |          |          | ?      | 租交易布200段    | 武部省巨勢大夫所 |
| 天平宝字 4 |          |          | 1. 5   | 糸 20斤       | 内裏       |
| 1. 11  | 120貫     | 葛木大夫     |        |             |          |
| 2      |          | *        |        |             |          |
| 3      |          | *        | 3. 3   | 調布 1端       | 院中       |
|        |          |          | 3. 7   | 綿 2段        | "        |
|        |          |          | ("     | 綿 30屯       | 内裏)      |
|        |          |          | 3. 18  | 綿 5端        | 院中       |
|        |          |          | "      | 調布 1段       | "        |
| 4      |          | *        | 4. 14  | 薄質布20端      | 内裏       |
|        |          |          | 4. 23  | 調布 3端       | "        |
| 4. 11  | 14貫      | 内裏       |        |             |          |
| 4. 15  | 100貫     | 坤宮官      |        |             |          |
| 4. 28  | 506文     | 内裏       |        |             |          |
| 5. 21  | 20文      | "        |        |             |          |
| 6      |          |          |        |             |          |
| 7. 5   | 96貫957文  | 坤宮官      |        |             |          |
| 8      |          |          |        |             |          |
| 9      |          |          |        |             |          |
| 10. 2  | 14貫940文  | 寺御息所     |        |             |          |
| 10. 17 | 10貫      | "        |        |             |          |
| 11. 2  | 15貫 60文  | "        | 11. 9  | 綿 79匹       | 法花寺      |
|        |          |          | "      | 綿 357屯      | "        |
| 11. 26 | 2貫       | 寺御息所     | "      | 調布 93段      | "        |
| 12. 30 | 8貫       | 寺御息所     | 12. 13 | 綿 74屯       | 内裏       |

\* 印については表6「丹波宅」での銭貨への交換を参照

貫七〇三文で、収入のうち直接錢貨で納入されたのは八四七貫八三八文でそれだけでは到底錢貨經費を満たし得ず、あとの必要經費は所々より納入した錢貨以外の現物を売却し、合計七〇一貫八六五文の「雑売物價」を得て賄われた。<sup>(24)</sup> すなわちここでもやはり現物財源によって錢貨が回収されているのである。この現物売却分の「雑売物價」には二つの錢貨獲得方法が項目に分けられている。即ち「院中平章」と「丹波宅」である。そのうち「院中平章」分に挙げられている諸品目の中の絁・糸・綿・調布・租交易布に関しては「造金堂所解」の後続部分にそれぞれ項目があり、品目別に収支を記してあるので、そのうちの錢貨に交換された分についてもその内訳等その他の状況について若干の手掛かりが得られる。<sup>(25)</sup>

まず、錢貨とそれぞれの現物品目の収納に関してであるが、それぞれの項目に納入者と納入の年月日の記載がありそれらの納入状況を各項目から拾い出して月別に整理したのが表5である。

収納物のうち、錢貨収納分は天平宝字三年八月から翌四年七月までは「内裏」、<sup>(26)</sup>「坤宮官」、又はその奉者と思われる池邊御倉・葛木大夫等からほぼ一月に一〇〇貫の割合で収納されている。四年二月から四月まではそれが見えないことをここでは指摘しておきたい。

次に現物収納分を見ると、(1)内裏、坤宮官からのもの、(2)女性、特に尼師からのもの、<sup>(27)</sup>(3)封戸諸物、の三つに収納経路が分けられる。このうち(3)の封戸諸物に関してはまとまった量が収納されているが、(1)(2)に関しては比較的少量少額の収納が特徴的である。この造営においては、先に見た一月約一〇〇貫の錢貨と封戸諸物が、經費に対する公的給付であり、<sup>(28)</sup>(1)(2)のような収納(錢貨における

少額収納も同様)は、個人的私的寄付といった性格のものであろう。そして造金堂所の側から見れば、臨時収入であったわけである。

以上見て来たような収納状況をふまえた上で、次に錢貨への交換状況、即ち「丹波宅」と「院中平章」でのそれぞれの交換状況について見てみたい。絁・綿等の各項目の用途記載部分にはそれぞれ「丹波宅」に送られた量と日付が記されている。又、錢貨項目の収納記載部分の「雑売物價」分の中には「丹波宅」より収納した錢貨の額と日付が記されている。この二つの記載部分から「丹波宅」による錢貨への交換について示したのが表6である。

表6「丹波宅」での錢貨への交換

|   | 現 物 奉 送                       |                     |   | 錢貨収納                        |
|---|-------------------------------|---------------------|---|-----------------------------|
|   | 施                             | 糸                   | 綿   |                             |
| 天平宝字 3<br>10. 19<br>11. 8<br>19<br>21<br>29<br>12. 2<br>9<br>14<br>26 | 61匹<br>110匹<br><br>30匹<br>60匹 |                     | 200屯<br>40屯<br><br>100屯 (筑紫調)<br>100屯 (因幡綿)<br>130屯 | 8貫<br>12貫<br><br>60貫<br>20貫 |
| 天平宝字 4<br>1<br>2. 24<br>28<br>3. 11<br>23<br>4. 22<br>4. 2            |                               | 200斤<br>200斤<br>80斤 |   | 100貫<br>100貫<br>90貫<br>10貫  |
| 不 明   | 50匹                           |                     |   |                             |
| 計   | 311匹                          | 480斤                | 570屯  | 400貫                        |



表7 収納・用途各品目に付記された国名対照表

|        |         | 近 江        | 播 磨        | 因 幡        | 但 馬        | 讃 岐        | 遠江  | 丹波  | 備 中           | 美濃       | 安芸  | 常 陸  | 三河       | 土佐       | 下野 | 越前  | 不 明             | 計        |
|--------|---------|------------|------------|------------|------------|------------|-----|-----|---------------|----------|-----|------|----------|----------|----|-----|-----------------|----------|
| 収<br>納 | 封 戸     | 70匹<br>神崎郡 | 70匹<br>赤穂郡 | 70匹<br>気多郡 | 70匹<br>養父郡 | 70匹<br>那珂郡 |     |     |               |          |     |      |          |          |    |     |                 | 350匹     |
|        | 東 花 藪   |            |            |            | 30匹        |            | 40匹 | 30匹 |               |          |     |      |          |          |    |     |                 | 100匹     |
|        | 内 裏     |            |            |            |            |            |     |     | 5匹<br>長絹      | 1匹<br>調絹 | 1匹  | 3匹3丈 | 1匹<br>白綿 | 1匹<br>帛綿 |    |     |                 | 12匹3丈    |
|        | 法花寺御息所  |            |            |            |            | 2匹<br>調綿   |     |     |               |          |     |      | 2匹<br>白綿 |          |    |     |                 | 4匹       |
|        | 安藤西院尼師所 |            |            | 10匹        | 20匹        |            |     |     |               |          |     |      |          |          | 4匹 | 10匹 |                 | 44匹      |
|        | 貞戒尼師所   |            |            | 10匹        |            |            |     |     |               |          |     |      |          |          |    |     |                 | 10匹      |
|        | 大野内侍所   |            |            |            |            |            |     |     | 1匹<br>調綿      |          |     |      | 1匹<br>白綿 |          |    |     |                 | 2匹       |
|        | 法 花 寺   |            |            |            |            |            |     |     |               |          |     |      |          |          |    |     | 79匹<br>雑交(易)    | 79匹      |
|        | 院 中     |            |            |            |            |            |     |     |               |          |     |      |          |          |    |     | 8尺<br>帛綿        | 8尺       |
| 用<br>途 | 買       |            |            |            |            |            |     |     |               |          |     |      |          |          |    |     | 1丈5尺7寸          | 1丈5尺7寸   |
|        | 奉送丹波宅   | 60匹        | 60匹        | 20匹        | 60匹        | 60匹        |     |     |               |          | 50匹 |      | 1匹<br>白綿 |          |    |     |                 | 311匹     |
|        | 院 中 平 章 |            |            | 31匹        | 60匹        | 1匹         | 20匹 | 20匹 | 6(77長<br>絹5)匹 | 1匹       | 1匹  | 3匹3丈 | 3匹<br>白綿 |          | 4匹 | 10匹 |                 | 160匹3丈   |
|        | 雑工等衣服料  |            |            |            |            |            |     |     |               |          |     |      |          |          |    |     | 128匹1丈5尺<br>国交易 | 128匹1丈5尺 |
| 途      | 雑 用 料   |            |            |            |            |            |     |     |               |          |     |      |          | 1匹<br>帛綿 |    |     | 1匹8丈7寸<br>77帛8尺 | 2匹8尺7寸   |

## 〔糸〕

|        |           | 美 作  | 伊 勢 | 伊 予  | 但 馬                | 因 幡                 | 伊 賀 | 国交易  | 不 明      | 計          |
|--------|-----------|------|-----|------|--------------------|---------------------|-----|------|----------|------------|
| 収<br>納 | 内 裏       | 210匁 | 10匁 |      |                    |                     |     |      |          | 220匁       |
|        | 院中貞戒尼師所   |      |     | 100匁 |                    |                     |     |      |          | 100匁       |
|        | 内 裏       |      |     |      |                    |                     |     | 20斤  |          | 20斤        |
|        | 封 戸       |      |     |      | 222斤3両2分<br>2米 養父郡 | 242斤14両2分<br>5米 気多郡 |     |      |          | 465斤2両1分1米 |
| 用<br>途 | 奉 送 丹 波 宅 |      |     |      | 220斤               | 260斤                |     |      |          | 480匁       |
|        | 院 中 売     |      |     | 80匁  |                    |                     | 90匁 | 153匁 |          | 323匁       |
|        | 雑 用 料     |      |     |      |                    |                     |     |      | 2斤2両1分1米 | 2斤2両1分1米   |

## 〔糸帛〕

|        |       | 筑 紫    | 越 中   | 豊 後  | 肥 後 | 石 見  | 因 幡                | 但 馬          | 出 雲 | 国交易  | 計    |
|--------|-------|--------|-------|------|-----|------|--------------------|--------------|-----|------|------|
| 収<br>納 | 東 花 藪 | 200屯 調 |       |      |     |      |                    |              |     |      | 200屯 |
|        | 内 裏   | 90屯 調  | 30屯 調 |      |     |      |                    |              |     | 74屯  | 194屯 |
|        | 法 花 寺 |        |       | 100屯 | 20屯 | 7屯 庸 |                    |              |     | 357屯 | 484屯 |
|        | 封 調 庸 |        |       |      |     |      | 278屯<br>気多郡調       | 276屯<br>養父郡庸 |     |      | 554屯 |
|        | 封租交易  |        |       |      |     |      | 126斤気多郡            |              |     |      | 126屯 |
|        | 阿刀内侍所 |        |       |      |     |      |                    |              | 4屯  |      | 4屯   |
| 用<br>途 | 買     |        | 2屯 調  |      |     |      |                    |              |     |      | 2屯   |
|        | 奉送丹波宅 | 100屯 調 |       |      |     |      | 230屯 庸             | 240屯 庸       |     |      | 570屯 |
|        | 院 中 売 | 100屯 調 |       |      |     |      | 178屯 庸綿<br>124屯 南綿 | 36屯 庸        |     |      | 438屯 |
|        | 雑 用 料 |        |       |      |     |      |                    |              |     | 550屯 | 550屯 |
| 途      | 残     |        | 6屯    |      |     |      |                    |              |     |      | 6屯   |

「丹波宅」の性格についてはよく分らないが、現物を銭貨に換える

場として「雑売物價」総額七七一貫一七九文のうち四〇〇貫はこの「丹波宅」で調達されたのであるから銭貨への交換に関しては「院中」を凌いでいる。又、「丹波宅」に送られた現物の量は全部で純三百十一匹、糸四八〇斤、綿五七〇屯で、各々が単位量価格何文であったかなどの細かい記載はないが、「丹波宅」におくられた純・糸・綿それぞれの量に仮に「院中」で交換された最高値、即ち純八〇〇文、糸一五〇文、綿六七文をかけて合計しても三五八貫九九〇文にしかない。これに対し、実際には四〇〇貫の銭貨が「丹波宅」から収納されたのであるから、「丹波宅」では現物がより高値で引き取られたことになる。

「丹波宅」への現物送進と銭貨の受理は、造営全期間にわたっているのではなく、天平宝字三年秋十月から翌四年春四月の間に集中している。又、純・綿・糸・布の各項目には収納部分にも用途部分にもそれぞれの物品がどここの出所のものであるか国名が付記されている。そこで純等の収納部分に付記された国名と、用途部分のうち「丹波宅」又は「院中」で銭貨へ交換された分に付記された国名とを対比してみると表7の如くであり、「丹波宅」へ送られているのは現物収納分のうち、「宝字三年料」として収納された封戸物と国名が対応しており、「丹波宅」へは封戸物がほぼ一括して送進されていたことがわかる。しかも、「丹波宅」へおくられた品目のところにだけ送進の年月日、単位量価格などが付記されており、又それと引き換えに収納した銭貨の額が四〇〇貫という整った数値であることから吉田氏も指摘されているように「丹波宅」での銭貨への交換は一括請け負いによるものと考えられる。<sup>(30)</sup>さらに先程

述べたように非常に高値で交換されたのは、このような一括請け負いによって、かつ価格の季節変動を利用することによって可能となったものであろう。

以上のことから、法華寺阿弥陀浄土院金堂の造営において造金堂所が財源として受け取った封戸諸物は、収納された秋から冬にかけて一括して請け負われて「丹波宅」へ送られ、銭貨に換えられているのである。又、封戸諸物の秋から冬にかけての収納時期に続く春期において造金堂所では銭貨の収納は「丹波宅」からの収納分を除くと、先程見たようになされていない。これらのことから考えて、「丹波宅」による封戸物一括請け負い交換は、造金堂所財政にとって初めから見込まれて必要銭貨獲得の為に確保されていた手段であったと考えられる。

さて、財源から銭貨への交換が行われたもうひとつの場面である「院中平章」ではどのような具体的な様相がつかめるであろうか。

「院中平章」による交換に用いられた諸物品がどこから収納されたかという点、表5から明らかのように造営に対する私的個人的寄付による収入、すなわち造金堂所にとっては、臨時の収入物品が主であった。この点において公的給付である封戸諸物が一括して交換された「丹波宅」とは対照的であったのである。そして臨時収納に応じてその時々必要に合わせて銭貨に交換したと考えられるのである。では「院中」における現物からの銭貨への交換とは具体的にはどのように行われたのであろうか。

「院中」即ち阿弥陀浄土院内において「平章」即ち価格を検討し取引を行うのであるが、「院中」で門戸を開放し、一般の人々に売り出した

とはまず考えられない。となると「院中」内部の人間、即ち法華寺・造金堂所関係の人間の内々で取引された可能性、すなわち（一）節で見えて来たような官人等による個別買い取り方式が行われていたことも可能性として考えられる。ところで、次に京内興販に関する以下の律令条文を考えてみたい。

凡除官市買者。皆就市交易。不得坐召物主。乖違時価。不論官私。交付其価。不得懸違。

（関市令 除官市買条）

ここでわざわざ規定から「官」が除外されているのは除外される必要があった為である。それは官は、市人と呼ばせて物資を売却する必要があったのであり、これは官司側からの余剩物資の放出であり、又逆に官市の側からすれば最大とも言うべき重要な供給源であった。<sup>(31)</sup>このような令規定に対応する当時の実態を示す具体的な史料はないのであるが、あるいは「院中平章」という簡明な語の向う側にはこのような交易の実態があったのではないだろうか。正倉院文書における同様の例としてはたとえば、先に見た天平宝字六年十二月に行われた二部大般若經書写における「二部般若雜物納帳」の十二月三十日条に、

又收納絶六匹一匹一貫 五匹別一貫一百文

右、買檢納如件、三綱所平章買者、

又收納絶十五匹五匹但馬調 一匹同国交易 九匹因幡調

布二十五端十五端信濃調 十端相模調 右、司裏平章買、檢納如件、

（5—305）

また閏十二月二十九日条にも、

收納白米六斛 右司裏平章檢納如件、

（16—129）

と見え、これは先の「院中平章」の例とは逆に、「司裏平章」することによって購入している例である。この場合も、「官」であるところの造東大寺司が、自らのもとへ市から呼び寄せて購入するという。まさに関市令徐官買条が例外として規定している。律令官司と市人とのつながりが存在した可能性が考えられるのである。<sup>(32)</sup>

以上、「造金堂所解」に記される二つの錢貨獲得過程である「丹波宅」と「院中平章」が実に対照的な全く性格の異なるものであることを見て来た。そしてこの全く異質な二つの過程が両輪となって八世紀流通経済の中で律令国家の造営事業の財政が支えられていたのである。

（三） 財源と錢貨

以上、（一）（二）で見て来たように、財政運営上、特に（二）のように、最初から功直支給等の為に巨額な錢貨が必要とされる場合であっても、事業財源としては代価として現物財源が支給され、その上で、錢貨を獲得する作業が不可欠な過程であったことを見て来た。すなわち国家が財政運営上、錢貨經費に対する支払いを行う場合、支払い手段として、錢貨が支払われてはおらず、財源としては現物が支払われ、その現物財源によって、すでに国家の手元から離れた錢貨が回収されているのである。これについて律令国家財政の錢貨財源について考えてみる必要がある。錢貨は、国家が独占的、一方的に地金より高い法定価値を付加

して発行することによって国家に財政的利益をもたらす財源となったことは事実である。ところが、そのような錢貨であっても当時の我国における産銅量は技術的限界<sup>(33)</sup>から産出量が少なく、当然鑄造発行量にも限界がある。又国家財政の諸支出によりひとたび社会に放出した錢貨は法定価値をもっているものであるから法定価値をもって回収しなければならず、<sup>(34)</sup>回収の為の恒常ルートとして調庸徭錢等の輸納の方法がとられたが、回収量は発行の一部に過ぎず、しかも回収された錢貨には財政的利得がない。この様に、国家による鑄造・発行量にも又その回収率にも限界があったので錢貨発行によって得られる財政的利得分、即ち財源的機能は、<sup>(35)</sup>発行時の大量発行による以外の通常時においては無尽蔵にその機能を發揮できた訳ではない。律令国家にとって錢貨が一方的な支払い手段として意図されたということは、錢貨発行の背後にある政策的意義としては認められても、錢貨の機能としては本源的なものとは認められないのである。もとより、八世紀における律令国家財政とそれを中心とする經濟構造は、律令租税制度に基づく「実物貢納經濟」<sup>(36)</sup>であり、全国から吸収する政府の現物財源総額に比べ、中央での錢貨発行による利益総額がどれほどの比重を占めていたかは明らかにできない。律令国家の推進する事業に錢貨経費が認められる場合であっても政府にとって財源とは、あくまで租税として全国から収納した諸現物であったのである。その為に(一)(二)で見たように事業運営上錢貨が必要とされる場合であっても現物が、錢貨に置換されることを前提として支給されているのである。

又、その様な前提のもとには、代価現物の財源的機能と、それによつ

ては果され得ない独自の働きを持つ錢貨の機能との歴然たる區別が存在しているのであって、両者の機能を混同し、二部大般若書事業例における調綿を、「綿を収納すると、直ちに売却し錢貨の獲得に努めることは、綿が本来の意味での物品貨幣の使命を持っていなかったのではないだろうか。」と危惧されつつも、「こうした物品貨幣は鑄造貨幣が発行されるようになった奈良時代においても一般には通用していたと考えられる。」<sup>(37)</sup>と述べられているように、綿について漠然と「物品貨幣」として把握するには少なくとも錢貨の流通していた範囲内においては問題がある。即ち財政運営において必要物資の交換過程における価値の形態轉換をあらわすならば、

W (現物財源) ↓ G (財源から交換されて得られる交換手段) ↓ W  
(事業の必要物資)

と表されるのであり、錢貨はまさに交換の役割を果しており、財源として支給された現物財源からは機能の面で分離している。当時、錢貨の流通がまだ市場社会における「本来的貨幣」の性格とは掛け離れていたにせよ、八世紀において錢貨の流通していた範囲内においては、現象面から見る限りではこのように交換手段としての機能こそが、錢貨の最も必要とされる機能、すなわち本源的機能であったと性格づけられるのである。そして、錢貨に財政史的意義を見いだそうとする場合、この本源的機能において錢貨が実際に果している機能においてこそ、本来の財政史的意義が認められるべきではないだろうか。

しかしである。錢貨が交換手段としての機能を果すからと言って、その逆に交換手段としての機能を果し得るのは錢貨のみであるとは言い切

れはしない。では何故先程から見て来たようにそこまでして錢貨を獲得することが必要不可欠とされたのか。そこには交換手段としての機能のほかにもそこから派生する機能で、錢貨でなければ果し得ない役割があったはずである。そのような独自の機能によって財政上錢貨が必要とされたことはなかったであろうか。

律令国家の經濟構造を「実物貢納經濟」と性格づける際、官司財政の円滑な運営の為に、その限界を補完するシステムとして財政予算上錢貨その他の代価物で計上される部分を含んでいた点が鬼頭氏によって指摘されている。<sup>(38)</sup>氏によればこの、財政予算上の貨幣計上のシステムについて用いられるのが、「代価物＝貨幣」という言葉であるように「実物貢納經濟」の限界を補完する為の流通經濟への依存と、そこで交換に用いられる代価物の必要性であって、官司財政の中で補完的役割を担うべきものは錢貨に限らずとも他の代価物でも良かったことになる。しかし、實際の官司財政上錢貨運用部分が組み込まれて行ったことについて、「実物貢納經濟」の限界を補完する為の代価計上という意味の外に錢貨として計上された意義、すなわち錢貨独自の機能に求められた意義を見究める必要はないであろうか。このような疑問点を詳細に検討して行くために章を分けて論じてみたい。

## 第二章 錢貨の効用について

本章では、實際の財政運営上の錢貨効果をさらに詳細かつ具体的に考察することによって、前章で明らかになった錢貨の本源的機能、即ち交

換手段としての機能から派生した独自の機能について追及してみたい。

### (一) 功直支給について

律令国家が、国家財政を圧迫する巨額な造営事業の功直の財源に錢貨を充てることを意図した点に錢貨発行の重要な意義があった点が指摘されており、従うべき見解であると思われるが、では功直支払いにおける錢貨の役割は功直支給の財源として支払い手段に用いられたことだけであつたのだろうか。ここでは、錢貨が功直として支払われた場合、錢貨がその他のいかなる役割を果たすことによって財政急迫を緩和したかを見てみたい。

八世紀中葉における造営関係史料のうち、石山寺造営関係の錢用帳は各種作業従事者に対する功直錢支給の実態を知る上での貴重な手掛かりとなってくれるものである。<sup>(40)</sup>

この「石山寺錢用帳」には天平宝字五年十二月二十四日から天平宝字七年正月三十日までの間、石山寺造営の全期間の長期にわたって造営現場における錢貨の用途と支出額が記載されている。この長期にわたる「石山寺錢用帳」に対し、天平宝字六年四月十一日から四月二十日までの錢用記載のある断簡（一断簡、二一紙、計三一行）が現存している。この錢用断簡の期間と同期間の部分の「石山寺錢用帳」の記載を比較すると必要物品購入の為の支出額や、様工に対する一工程毎の功錢支給額は一致する。但し、錢用断簡の方は雇人に対する支給の状況を各雇夫一人一人の名前を明記して各人の支給額を記した、日々の詳細な記録であるが、「石山寺錢用帳」の方では功錢支給額の記載が月単位にその月末

か翌月はじめにまとめて記されている。この様な違いから銭用断簡が日々の支給状況その他を、支給時から極く近い時点で記録した帳簿の断簡であるのに対し、「石山寺銭用帳」の方は支出時から時間を隔てたのちに日々の支出をまとめて作成した帳簿であったことがわかる。

|   | 大日古の所在                 | 年月日                                       | 支出額   | 内訳   |
|---|------------------------|---|---|--|
| A | 4:532-536              | 天平宝字<br>5. 12. 27<br>6. 1. 8<br><br>2. 30 | 144文<br>3639文<br><br>9278文                    | 厩夫12人×12文<br>厩夫3人×17文+2人×14文+14人×15文+厩女15人×5文+厩夫3330文<br>(正月~2月下旬の功直)<br>厩工30人×20文+40人×17文+4人×12文+14人×16文+94人×15文<br>+厩夫11人×13文+280人×12文+124人×11文+108人×10文+20人×9文<br>+18人×8文+5人×6文+厩女3人×5文<br>(2月の功直)  |
| B | 5:355-360              | 3. 8<br>11<br>15<br>22<br>26<br>30        | 160文<br>100文<br>750文<br>650文<br>300文<br>7292文 | 斎館房一宇檜皮工16人×10文<br>木工11人<br>木工11人 大山寺功料<br>木工11人 大山寺功料<br>木工11人 大山寺功料<br>木工11人 大山寺功料<br>木工11人 大山寺功料<br>木工74人×16文+79人×15文+8人×14文+2人×12文+厩夫16人×15文<br>+22人×13文+256人半×12文+3人×5文+54人×11文+19人×10文+36人×8文<br>+7人×7文+7人×6文+厩女3人×6文+6人×5文<br>(3月の功直) |
| C | 15:442(1)-443(8)       | 4. 13                                     | 1100文   | 薬仏堂一宇檜皮樑工等功  |
| D | 15:443(9)-444(7)       | 17  | 180文  | 斎館阿房一宇檜皮樑力郎万呂等18人×10文  |
| E | 5:360-362              | 26<br>27                                  | 270文<br>480文                                  | 斎館阿房一宇檜皮郎万呂等27人×10文<br>第一禮房一宇檜皮重30人×10文+第二禮房一宇檜皮重18人×10文   |
| F | 15:450(8)<br>-451(10)  | 5. 7                                      | 7789文   | 厩夫112人×15文+61人×16文+67人×14文+厩土工28人×16文+27人×10文<br>+厩夫248人×12文+5人×10文+41人×11文<br>(4月の功直)   |
| G | 15:451(11)<br>-452(12) | 15  | 30文   | 飯室天満守正女領給料   |
| H | 15:446(7)-448(8)       | 27<br><br>6. 5<br>13                      | 687文<br><br>1092文<br>55文<br>140文              | 木工5人×16文+7人×15文+土工11人×16文+厩夫17人×12文+5人×11文<br>+4人×8文+厩女5人×7文<br>(5月の功直)<br>厩夫81人×12文<br>厩女2人×7文+6人×6文<br>厩工阿太広公10番目×14文  |
| I | 15:448(9)-450(7)       | 27  | 270文  | 斎館腰一宇檜皮樑工倉古万呂27人×10文   |
| J | 5:362-369(3)           | 7. 7                                      | 60文<br>50文                                    | 2人×2日×15文<br>1人×5日×10文   |
| K | 5:369(8)-371           | 8. 9                                      | 1540文<br>1910文<br>936文                        | 木工17人×16文+仕丁84人×12文+4人×10文+小子44人×5文<br>木工37人×14文+23人×13文+正丁6人×13文+52人×9文+35人×8文<br>+10人×6文<br>(6月の功直)<br>仕丁104人×9文<br>(7月の功直)  |
| L | 15:444-446             | 9. 5                                      | 20文   | 御師院衆登次厩夫功  |

| 種 別       | 雇 木 工     |    |    |    |     |    |    | 雇 土 工  |    |    | 雇 夫       |    |      |     |     |     |    |   |    |   | 雇 女 小 子 |    |    |   |    | 所 在 |        |  |  |            |       |
|-----------|-----------|----|----|----|-----|----|----|--------|----|----|-----------|----|------|-----|-----|-----|----|---|----|---|---------|----|----|---|----|-----|--------|--|--|------------|-------|
|           | 内 訳 (功 銭) |    |    |    |     |    |    | 内訳(功銭) |    |    | 内 訳 (功 銭) |    |      |     |     |     |    |   |    |   | 内訳(功銭)  |    |    |   |    |     | 内訳(功銭) |  |  |            |       |
|           | 20        | 17 | 16 | 15 | 14  | 13 | 12 | 16     | 14 | 10 | 15        | 13 | 12   | 11  | 10  | 9   | 8  | 7 | 6  | 7 | 6       | 5  | 5  | 4 | 3  |     |        |  |  |            |       |
| 天平宝字5年12月 |           |    |    |    |     |    |    |        |    |    |           | 12 |      |     |     |     |    |   |    |   |         |    |    |   |    |     |        |  |  |            | 4:533 |
| 6年1月～2月上旬 |           |    | 3  |    |     | 14 | 2  |        |    |    |           |    |      |     |     |     |    |   |    |   |         | 15 |    |   |    |     |        |  |  |            | 4:534 |
| “ 2月      | 30        | 40 | 14 |    | 94  |    | 4  |        |    |    |           | 11 | 280  | 124 | 108 | 20  | 18 |   | 5  |   |         | 3  |    |   |    |     |        |  |  | 4:534      |       |
| “ 3月      |           |    |    | 74 | 79  | 8  | 2  |        |    |    | 16        | 22 | 2565 | 54  | 19  |     | 35 | 2 | 7  |   |         | 3  | 6  | 3 |    |     |        |  |  | 15:442     |       |
| “ 4月      |           |    |    | 61 | 112 | 67 |    | 28     |    | 27 |           |    | 248  | 41  | 5   |     |    |   |    |   |         |    |    |   |    |     |        |  |  | 15:451     |       |
| “ 5月      |           |    |    | 5  | 7   |    |    | 11     |    |    |           |    | 108  | 5   |     |     | 4  |   |    |   | 7       | 6  | 1  |   |    |     |        |  |  | 15:446-447 |       |
| “ 6月      |           |    |    | 17 |     |    |    |        | 10 |    |           |    | 84   |     | 4   |     |    |   |    |   |         |    | 44 |   |    |     |        |  |  | 15:369-370 |       |
| “ 7月      |           |    |    |    |     | 37 | 23 |        |    |    |           |    |      |     | 6   | 156 | 35 |   | 10 |   |         |    |    |   | 38 | 24  |        |  |  | 5:370      |       |

福山敏男「奈良時代に於ける石山寺の造営」（『日本建築史の研究』所収）第23表による（一部訂正）。

「石山寺銭用帳」は後の段階になってまとめられた帳簿であるので、雇工・雇夫等に対する支給状況については具体的な事情は分からないが、銭用断簡（表11）を見てみると、雇夫等が支給を受ける日数単位に、二日、三日、五日等、非常に短期日数分の支給を受けている例が見られる。このような支給方式は何を示すのであろうか。これは造営に継続的に従事する同一の雇夫に分割して支給しているのでは無さそうである。それは

表11 石山寺造営に関する  
天平宝字6年4月9日~20日分銭用文案断簡  
(15:457~460)

| 日付    | 支出   | 用  | 途                                      |
|-------|--|--|--|
| 11日   | 3000文<br>24文   | 去3月中雇夫等物料<br>雇夫大伴乙万呂   | 3日×8文                                  |
| (13日) | 1100文  | 葺板皮櫓工  |  |
| 14日   | 20文  | 除陽御布施  |  |
| 15日   | 48文<br>42文<br>24文<br>36文<br>24文<br>24文<br>24文<br>24文 | 自奈良遣木曾雇夫<br>雇夫大目石足<br>三根虫足<br>木曾多人<br>手門口<br>新田等奈良万呂<br>大野広前 | 2人×24文<br>3日×14文                       |
| 16日   | 261文   | 紀國吉田<br>山内万呂<br>川内乙万呂  | 8日×15文=99文<br>7日×15文=87文<br>6日×15文=75文 |
| 17日   | 111文<br>264文   | 河内込田<br>箕原岡房櫓皮櫓工<br>日置得万呂                                    | 9日(1日×15文+8日×12文)<br>力180文<br>7日×12文   |
| 18日   | 80文<br>80文   | 森山万呂<br>御老   | 5日×16文<br>5日×16文                       |
| 19日   | 60文  | 御田部萬万呂   | 5日×12文                                 |
| 20日   | 24文  | 川内乙万呂  | 2日×12文                                 |

四月十一日に三日分を支給されている大伴乙万呂が、又は十五日に三日分を支給されている雇工犬甘石足なる人物が、その後の小単位日数後に再び銭用断簡に現れても良いはずであるが、実際にはそうはなっていないことから明らかである。故に銭用断簡にこのような短期日数の功直銭支給が現れるのは継続的に従事している雇夫等への分割支給とは考えられないのである。つまりここで見られる限り、短期日数ずつ異なる雇夫へ支給しているのである。銭用断簡に見える川内乙万呂に注目してみると、四月十六日に六日分の功直銭を支給され、又、四月二十日に二日分の功直銭を支給されている。この川内乙万呂という人物の場合、四月十六日までの六日間造営に従事し、十七日・十八日の二日間は造営労働に出動せず、そして十九日・二十日と二日間再び造営に従事したと考えられるのである。この様に一般民を短期日数雇用することは、必要な雇夫を必要な時に必要な日数だけ、すなわち必要とする分だけの労働量を確保する方針であったのであり、このような柔軟な体制で雇夫らを雇い入れる体制が、功直支給の面で確立していたことを意味するのである。<sup>(42)</sup>

さらに、各功直銭支給対象者の受ける支給額について見てみると、表10の如く、木工については、二〇文から一二文まで七段階、土工については一六文から一〇文まで三段階、雇夫については一五文から六文まで九段階、雇女については七文から五文まで三段階という様に各対象者の中で非常に細かい等級の使い分けがなされているのである。功直銭を支給する造営主体者側がこの様な支給額についての細かい等級づけをもっていたということは何を意味するのであろうか。それは各個人の持つ労働能力に応じた支給額を想定することによってどの様な人間のどの様な

能力をも造営労働力として搾取しようとする意図が窺われるのであり、<sup>(43)</sup>支給に差額を設けることによって財政的にも合理化が図られたことを意味するのである。

以上、造営事業に京内周辺の一般農民に労働力を求めた際、一つに短期日数ずつでも柔軟に受け入れることによって、又、一つに万人のいかなる労働力をも搾取できるよう、能力に応じた支給することによって、幅広くしかも合理的に労働力を求めることが雇用方針として見られた訳であるが、この様に造営事業に必要とされる労働力を幅広く、合理的に求めることを可能にしたのは、労働報酬を日割りで支給したり、又、細かい等級制をそこに設けることが可能であった為である。つまりそこでは、労働報酬物として小単位の価値物の存在が必須の条件となってくる。それは布帛類などの現物では価値の細分化に限界がある為に、不可能であり、小単位価値の交換手段として設定された銭貨のみが細かい労働価値を計量化することが可能であったのである。

銭貨による功直支給という場合、銭貨の財源としての機能の外に、小単位価値の交換手段として設定された銭貨に、以上のような、現物では不可能な労働報酬の価値の細分化を行い得る機能があったことも、律令国家の功直支給において銭貨が果たした重要な機能の一つであった。

## (二) 布施について

八世紀における銭貨機能を知る上での次なる実例として、写経所において経生・裝潢生・校生に対する労働報酬として支払われた布施について取り上げ、そこでの銭貨の機能と銭用効果について述べてみたい。

写経所の布施については今までに山田英雄氏・井上薫氏・熊倉千鶴子氏等による研究がある。<sup>(44)</sup>中でも山田氏による研究が従来の布施の研究の基本路線を築き、継承されている。<sup>(45)</sup>

山田論文では布施の性格・種類・計算・支給額の変化が詳細に述べられている他、個々の布施支給例のうち特殊な支給状況を呈するものについてはその要因とともに列挙され、又布施の種類別にもその支給例を整理されておられるが、写経事業自体の性格の違いによる年代順の統一的な分類整理がなされていない。そこで正倉院文書に残された布施支給例について知ることのできる史料を、天平七年から宝龜四年まで全て拾い出し、常写と間写、即ち一切経と個々の本願経の区別を中心に年代的統一整理を行ってみた。それが別表「A」～「F」の示す通りである。以下それぞれの年代の支給状況について具体的に検討していきたい。<sup>(46)</sup>

## △天平一〇年まで▽

常写にも間写にも布・純・綿が見え、又、二種以上のものを併せて支給している例も見られる。正倉院文書の布施支給の初期の例がこの様に種々のものが見られるのは、律令官人の俸禄が布・純・綿で支給されることや、又、延喜大藏式に見える法会等の際の講師の布施が布・純・綿で混合支給される規定が見え、写経所の布施もそれらの報酬物に漠然と準拠したものであって布施物を一本化する方針がまだ持たなかったものと思われる。その際の換算率は、基本計算は布一端〇四〇張で行い、そこから純・綿に換算している。すなわち、布一端〇純二匹〇綿六屯という率である。



表15

| 年月       |     | 天平 <sup>10</sup> |   |   |   |   |    |    |    |   |   |   |   | 天平 <sup>11</sup> |   |   |   |   |    |       |  |   |   |  |  |  |
|----------|-----|------------------|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|---|------------------|---|---|---|---|----|-------|--|---|---|--|--|--|
| 写経事業     |     | 5                | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5                | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | ..... |  |   |   |  |  |  |
| 五月<br>日経 | 経生  | △                |   |   |   |   |    |    |    |   |   |   |   |                  |   |   |   |   |    |       |  | ⊕ | → |  |  |  |
|          | 装清生 |                  |   |   |   |   |    |    |    | ⊕ | → |   |   |                  |   |   |   |   |    |       |  |   |   |  |  |  |
|          | 校生  |                  |   |   |   |   |    |    |    |   |   |   |   |                  |   | ⊕ | → |   |    |       |  |   |   |  |  |  |
| 間 写 経    |     | △                |   |   |   |   |    |    |    |   |   |   |   | ⊕                | → |   |   |   |    |       |  |   |   |  |  |  |

⊕＝確認できる銭貨支給の最も早い時点、△＝そこから最も近い過去の支給例（いずれも布・綿・純）

△天平十一年から天平十七年まで▽

天平十年から十一年にかけて布施支給に一つの方針の変化が見られる。まず五月一日経の布施について見てみると、経生の場合、充紙帳（7130～145）には天平十年五月分の次に天平十一年七月からの分が書き継がれている。この間の経生の書写過程については十年五月から十二月にかけて百十二巻が、十一年一月から二月にかけて九十二巻の書写が進行したことが推定されており、その後三月から六月については不明であるが十一年七月十二日から充紙が再開されている。十年五月以降十一年初めの間の布施は十年八月六日の「経師等造物并給物案」（7184～186）によると、布・純・綿の混合（「布九百二十八端」純綿并成布とある）で支給されていることがわかる。又、先の充紙帳には十一年七月からの分についてのみ布施支給の記載が書き込まれているが、それは銭の文数で見えており、十一年七月から銭で支給されている。

装演の場合は十年十二月の時点で銭が支給されていることが確認できる（7146・157）。校生の場合は校帳（7159～165）を見ると、十年四月の段階で布又は純で支給されており、その後十一年七月から九月の校帳（71381～386）に銭支給の記載が見られる。

以上の様に天平十年末から翌十一年にかけての時期に、五月一日経の布施は装演生に関しては十年十二月から、又経生・校生に関しては十一年七月から、布・

純・綿の混合支給に代わって銭支給への一本化方針へと変わっていることが確認できる。（表15）

一方、間写経については天平十年八月六日の、常写と一括して記されている先の「経師等造物并給物案」では、布・純・綿の混合で支給されているが、天平十一年四月十五日の間写法花経七百九十二巻の布施に関する「写経司啓」（2161～165）では、冒頭集計部分に「応給布」として布で算出している布施を「計銭」として銭に換算し直して銭で支給している。又、同じく天平十一年四月二十五日の法花経八巻の布施に関する「写経司啓」（2166～167）では各経生等の布支給量が抹消され、銭支給へ書き込み修正されている。間写経ではこの十一年四月の時点で銭支給の例が確認され、これ以降銭支給に一本化されている。

このように常写に関しても間写に関しても天平十年末から翌十一年の間にかけて、それまで布・純・綿で混合支給していた状態から銭支給への一本化方針の変化が確認でき、その際の換算率は経生の場合、

経生 四十張＝布一端＝二〇〇文即ち一張＝五文

校生 一〇〇〇張＝布一端＝二〇〇文即ち五張＝一文 ※

装演生 四〇〇張＝布一端＝二〇〇文即ち二張＝一文

という計算で行われており、書写・校正・装演各々の労働量がまず布を尺度として計量化され、支給はそれに相当する銭貨が支給される。これ以後しばらくは銭貨で支給される場合には、こうして導き出された値をもとにいちいち布換算をせずに、労働量が直接銭に換算される方法が定着し、換算率にも変化は見られない（これは、布の価格が安定していた為にもよるであろう）。

そして常写はその後最後まで、又、間写は天平十七年末の段階まで布施支給が錢による一本化方針で行われている。<sup>(49)</sup>

#### △天平十七年末から天平二十年まで▽

五月一日経は一貫して錢支給が変わらない。これに對し間写では天平十七年十一月以降錢以外の支給が見られる様になる。その最初の例は天平十七年十一月十二月に行われた大般若經一部六百卷即ち難波之御時御願大般若經で、十七年十二月二十五日付の「布施申請解案」(2—481)等によると絶によつて布施が支給されていることがわかる。この絶の残りは、天平二十年七月二十日付の「東大寺写經所解」(10—304)<sup>(50)</sup>によると天平十八年から始まつた後写一切經の布施に使用され、その後も後写一切經の布施は全て絶で支給されており、先写一切經については不明であるが、五月一日経が同じ一切經でありながら一貫してこの後も錢支給であるのと顯著な対照をなしている。この、絶で支給された難波之御時御願大般若經と後写一切經の二者は聖武天皇の発願という点で共通していると思われ、<sup>(51)</sup>支給形態が絶という特殊な点も、或はそのことと関連するのかもしれない。

尚、絶支給の際の労働量は

經生 鹿經八〇張一匹(布二端〓絶一匹)

(注は六〇張一匹)

校生 二〇〇〇張一匹(布二端〓絶一匹)

装演生 八〇〇張一匹(布二端〓絶一匹)

として表示された。当時の布と絶の比価は、一对三であるにも拘わら

ず、布二端で絶一匹を算出しており、ここでも布が労働量から支給物品への換算の尺度となっている。

さて天平十八年になると間写には布で支給する例が見られるようになる。間写は常写と一括して布施申請がなされる場合には錢で支給されている(天平十八年春季手実・9—142)が、天平十八年から天平勝宝初年にかけて間写は錢か布のいずれかで支給され、両者の違いが何に由来するのかは不明である。その際の換算率は先に定着していたもの※と同じである。

#### △天平勝宝年間▽

天平勝宝年間になると常写はかなり規模が小さくなり、細々と継続されているが布施支給に関しては原則として錢で支給されている。又、間写の例を見ると先の例と同様常写と一括して申請される場合には錢で支給されるが(別表D勝宝三年末、3—528他)、それ以外の場合は錢・布混在して支給される状態から、天平勝宝三・四年頃を堺として支給方針が布に一本化されている。即ち錢による支給は常写と、常写と一括される場合の間写とその他の例外のみになり、布による支給が主流となつていく傾向が見いだされる。換算率には変化はない。

#### △天平宝字年間▽

天平宝字年間になるとすでに常写は天平勝宝末年までに終了されているので、個々の本願經が写經事業の中心になっているが、それらの布施はいくつかの例外を除くと、全て布で支給されている。換算率も従来通

りである。

天平宝字四年からの坤宮御願一切経も史料から知られる限りは全て布で支給されている。

いくつかの例外とは、第一に、天平宝字二年十二月に見える知識大般若経<sup>(53)</sup>である。この知識大般若経とは、奉仕的に官人等を知識として写経に参加させる知識経のうち、写経所に写経を依頼された分の書写を行ったものであるが、これに対する布施支給は依頼の際に写経料として納められたものの中から銭で支給された(14—202・十一月三日条、14—203・同九日条)。

第二に、非常に零細な規模の写経については銭で支給されている。

(14—197・方廣経三巻、5—497・薬師経他二十三張分の書写等)。

第三に、天平宝字二年の金剛般若経一千巻・薬師経百二十巻・新編索経二百八十巻の計二千四百巻分の布施は布で申請されたが(4—301、14—27)、実際には申請先の紫微中台からは溢幡絶一三匹・橡絶九匹・羅八匹・参河白絶一九七匹・石見調綿一〇五一屯・庸綿六五一屯が布に代わる代価として支給された。これは二千四百巻経の申請布施布総量一〇八三端二丈八尺を端別二六〇文で換算すると、銭二八一貫七四八文になるが、支給された諸品目をそれぞれ所定の価格で銭貨に換算し、総計すると、ちょうど申請した布の銭貨表示額と、同額になるものとして種種雑多なものありあわせで代価支給されたものであった(14—53)。そして写経所ではこれを各経生等に班給する際、布施申請解に記した各経生等の布支給量をまず、布一端二六〇文で「準銭」額を算出し、この銭貨の額面を各品目の単位量価格によって埋め充てていく作業が行われた

(14—27)<sup>(54)</sup>。そして各品目の単位量価格にとって埋め充てていって余った半端分の額は銭貨によって支給された(14—1他)<sup>(55)</sup>。このような二千四百巻経の布施支給の際の現物の単位量に満たない剰余半端数分を銭貨で支給する方法は、この直後の後金剛般若経一千二百巻の布施支給の際にも受け継がれ、天平宝字二年十一月三日付の「布施申請解」(14—226)によると、書写枚数から布に換算し、実際に布で支給したが、布に換算した際、布の端数の整数倍以下の一端に満たない分については銭貨に換算して銭貨で支給している。

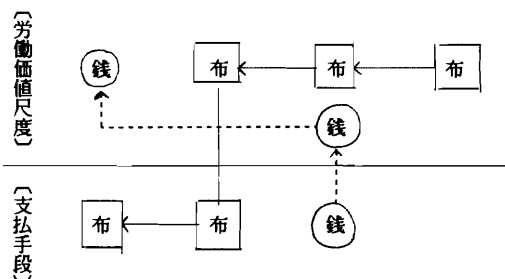
天平宝字年間の第四の例外として、七年におこなわれた仁王経疏書写に対する布施は、申請時には布で申請されているが(16—321)、「謹解申用紙事」(16—429)という文書に各歴名経生等の書写枚数の下に、屯数の書き込みが見られ、綿で支給されたものと思われる。

#### △神護景雲四年まで▽

この期間、次々と書写されていった五部の一切経に関する布施は、当初に銭で支給する例が一つだけ見られるが(6—42)、そこでは「新銭」が見えることから、神功開宝発行との関係で銭で支給されたと思われるが、以後は一貫して布である。但し山田氏の指摘される通りこの頃の支給量は以前に比べ同じ布一端に対し二倍の仕事量が必要となっていた。即ち、労働量を同時に表示していた布と銭貨の二つが、その比価が変化しなければ同時に表示することも可能であるが、この時期布の価値が上昇してしまい、一端〓二〇〇文でなくなってしまった。そこで、銭貨と労働量との間の定率が据え置かれ、今度は、銭貨によって計量化された

| 年代               |                | 735 天平 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 750 天平 1 2 3 4 5 6 7 8 |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 760 天平 1 2 3 4 5 6 7 8 |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 765 天平 1 2 1 2 1 2 1 2 3 4 |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 770 宝龜 1 2 3 4 5 6 7 |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 775 宝龜 1 2 3 4 5 6 7 |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|------------------|----------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|------------------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|------------------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|----------------------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|----------------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|----------------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| 写経事業             |                |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                        |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                        |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                            |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                      |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                      |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 一<br>切<br>写<br>経 | 五月一日経          | 布 綿 綿  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 錢                      |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                        |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                            |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                      |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                      |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|                  | 大官一切経<br>先写一切経 |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | ?                      |  |  |  |  |  |  |  |  |  | ?                      |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                            |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                      |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                      |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|                  | 後写一切経          |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                        |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 綿                      |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                            |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                      |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                      |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|                  | 坤宮御願<br>一切経    |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                        |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                        |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 布                          |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                      |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                      |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|                  | 五部一切経          |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                        |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                        |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                            |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                      |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 布                    |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 個々の本願経           |                | <p>五月一日経と一括申請の場合のみ</p> <p>布 綿 綿      錢      布      錢・薬師経他五卷      錢・法花経他十八卷      錢・薬師経他五卷      錢・法花経他十八卷</p> <p>(例外) 錢・知大經三卷      錢・仏頂経一卷      錢・大般若経</p> |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                        |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                        |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                            |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                      |  |  |  |  |  |  |  |  |  |                      |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |

|   |  |  |   |
|---|--|--|---|
| <p>天平一〇年以前</p> <p>神護景雲四年<br/>宝龜四年</p>       | <p>天平一八年<br/>天平宝字末年</p>  | <p>天平一一年<br/>天平一七年</p>                               | <p>天平一〇年以前</p>                                  |
| <p>労働価値尺度</p> <p>支払手段</p> <p>布</p> <p>錢</p> | <p>労働価値尺度</p> <p>支払手段</p> <p>布</p> <p>布</p> <p>錢</p> <p>錢</p> <p>總</p> | <p>労働価値尺度</p> <p>支払手段</p> <p>布</p> <p>錢</p> <p>錢</p> | <p>労働価値尺度</p> <p>支払手段</p> <p>布</p> <p>諸現物混合</p> |



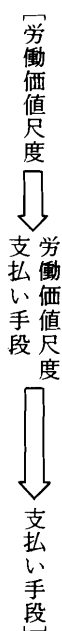
— 20 —

布が布施の支給品目として唯一の支払い手段に用いられることが支給方針として確立されるのは、天平十八年以降天平勝宝年間を通じ間写の支給においては布に一本化された以後のことである。それまでの支払い手段としては布・絶・綿の混合支給の時代から銭一本化支給の時代が続いていたのであり、そのような中で布は書写・校生・装潢の労働量（枚数）を計量化し、布施支給額を算出する為の基準尺度、即ち労働価値尺度としての機能を担っていた。

天平十八年以降、支給品目の銭、布、又は絶の混在状態から徐々に布へ一本化に向かうと、布は支払い手段としても主流となり、この時点で布施支給における布の役割は労働価値尺度としての機能と、支払い手段としての機能を、初めて同時に担うことになる。

ところが、宝龜年間に至ると布施額算出の為の労働価値尺度は、天平十一年頃に支給品目に銭が登場した時点で布による支給額から二次的に導かれた写紙四〇張＝布一端＝二〇〇文という固定換算率のうち、四〇張＝一端は捨象され、一紙五文という銭貨換算率が銭貨価値下落にもかかわらず据え置かれた形で、銭貨が布に代わって労働価値を表示することになり、労働価値尺度としての機能は、銭貨に奪われたことになる。

このように、布施支給方針の時期的変化を詳細に分析したところでは、支給方針における労働価値尺度と支払い手段という二つの機能は相伴うものではなく、年代によっては分離しているものであり、布について言う



というように、労働価値尺度から支払い手段への機能の移行が指摘できるのである。ところで、八世紀初めに、律令規定において布の持っている価値表示体系が和同開珎の発行に伴い、布から銭貨へ置換されるという政策的措置が取られたのであるが、<sup>(56)</sup>実際の経済現象として、布施支給における変化を見るならば、そこでも以上のように両者の機能の移行と分離と言う現象が展開されているのである。尤もそのことが政策的措置を反映したものなのか、また政策的意図とは関係無く交換経済の発展の中で独自に発達したものなのかはすぐには判断できかねる問題である。

以上、布施支給における方針の変化の中に、労働価値尺度機能と、支払い手段機能の分離による構造的変化について述べてみたが、次に、このような変化の中で、銭貨がいかなる目的で用いられたのか、又、銭貨に期待された機能とはなんであつたかをみて行きたい。

天平十年から翌十一年にかけて、支給品目が布・絶・綿の混合支給の状態から銭貨へと一本化する支給方針の変化がみられることを指摘しておいたが、この銭による一本化への支給方針の変化には布・絶・綿のいずれかの物品による一本化とは異なり、銭貨を用いることによって銭貨機能に期待する何らかの目的があつた為の方針の変化であると思われる。それは銭貨によって果されどのような機能に期待しての方針の変化であつたのであろうか。そこでは銭貨を用いることによってのみ可能な効果、つまり布等の物品では支給に困難を生じるような不測の事態を解決する為に銭貨効果が期待された所以があつたはずである。それは何であらうか。時代はやや下るが、布等の物品で支給に困難を生じている顯著

な例をいくつか挙げてみよう。

天平勝宝二年十二月二十三日付けの種々の間写経九十六巻と五月一日  
経内疏二百六巻合わせて三百二巻分の布施を申請した「造東大寺司解」  
(11—439)は、銭で申請した布施申請解の各歴名経生等の銭貨額に対し、  
布の端数で書き込み修正がされており、銭から布へと修正された極めて  
珍しい例であるが、この布の端数による書き込み修正を見てみると、

秦在儀写紙五十一張 <sup>#3</sup>「布一端 余十五張」

<sup>#2</sup>「布一端一丈七尺五寸」  
<sup>#1</sup>銭三百五十七文

(#1—3のみ筆者加筆)

このように二段階の修正が加えられている。ここではまず、写紙五  
張に対し、疏一張七文(申請解の冒頭集計部分に記される換算率)で  
銭三五七文が算出された(#1)。次に布支給額に修正される為に、写  
紙の横に記されている三十六という数字で一端として計算し、一端一丈  
七尺五寸なる支給額が算出された(#2)。ところがこれが再度修正さ  
れ、布の端数以下の一端に満たない部分が切り捨てられ、「余十五張」  
のように囲い込み抹消がなされた(#3)。特に布による二段階の修正  
のうち、#2の修正作業は冒頭の経生一〇人のみに見え、一人目以降  
は#1から直接#3の修正が加えられている。ここではこのような操作  
が歴名経生全員の支給記載に施されており、布の端数の整数倍になる様  
修正が加えられているのである。同様の例として山田氏の論文にも挙げ  
られている天平勝宝三年八月十二日付けの壽量品経二千五十九巻の布施  
申請解である「写書所解」(3—516)においては、この写経は四〇張

一端として支給される他の写経と何ら異なる特殊事情を持たないにも拘  
らず、五〇張<sup>(58)</sup>一端として支給額が算出されている。この例も、山田氏  
も言われている様に先の例と同じく、布一端的の整数倍になる様操作が加  
えられているのである。<sup>(59)</sup>

以上、二つの例が示すように布などの物品によって布施を支給する場  
合、布であれば一端という単位量以下の半端数の支給を厭い、その為に  
色々な操作を加える等の苦勞が所々に窺われるのであり、物品支給の場  
合に生じる困難とは、このような物品の単位量以下の半端数支給におい  
てであったと考えられる。

そこで先にも挙げた天平宝字二年の金剛般若経一千巻、千手千眼経、  
薬師経・新羅索経一千四百巻の布施支給例における銭貨運用についても  
う一度考えてみたい。この二千四百巻経の場合には「准銭」額に代価現  
物をそれぞれ単位量の整数倍額ずつ埋め充ていき、どの物品の単位量  
額にも満たない残りの半端額は銭貨で支給された。又、同年十月の後金  
剛般若経一千二百巻の場合には、布一端的の整数倍になる部分にのみ布を  
充て、一端に満たない写紙量部分についてはそれぞれ銭貨で支給されて  
いるのである。

このような銭貨運用例と先の二つの例に見た物品支給における単位量  
以下の半端数量の処理に見られる困難と苦勞とを考え合わせると、銭貨  
とは、物品支給において単位量を分割することによって物品としての価  
値を損ないかねないような、分割支給の困難さを解消する役割を果たすこ  
とが可能であったと考えられる。

こう考えると、天平勝宝年間以降、支給品目として布が一本化されて

くる中で書写量が細々となった常疏と例外的零細写経に対しては、錢貨による支給の途が残されていることも、錢貨によって少額支給の困難解消が可能となる点から理解される。

布その他の現物では單位量の分割には限界があり、その点錢貨によれば布一端分の価値を二百分の一まで細分化することが可能であり、そのようなほかならぬ錢貨によってのみ可能な価値の細分化機能に、錢貨運用の効果が期待されたのである。

このように現物の価値を細分化する機能を錢貨に期待した例は「石山院祿物班給注文」なる文書に以下のようにあらわれている。

石山院

合請祿絶五匹 布四端

絶一匹

右、依宣旨、給品治石弓

絶四匹 沽價錢四貫三百文 二匹別一貫一百文 並丹波

布四端 沽價錢一貫四百二十文 信濃二端別三百六十文 武蔵二端別三百五十文

惣價錢五貫七百二十文

三百文給長上船木宿奈万呂

一貫九百文給領十一人料

案主下道主 四百文 上馬甘 二百文

領〇三嶋豊羽 阿刀乙万呂 玉作子綿 已上四人別二百文

勝屋主 三百文 橋守金弓

道豊足 秦足人 弓削伯万呂 工広道 已上五人別百文

二貫六百七十文給雜工十人料

木工勾猪万呂 秦九月 他田小豊 丸マ小公 已上四人別三百卅文

甲賀深万呂 穂積河内 丈マ真犬 秦広津 已上四人別二百卅文

鉄工物部根万呂 二百卅文

土工私部有人 二百文

六百五十文給仕丁十三人料 人別五十文

百文優婆夷津守玉女料

百文酒買即給雜工等 五斗酒直

以前、所賜祿物等、班給如件、

天平宝字六年三月廿一日案主下

主典安都宿祿

(5—145)

ここでは現物で賜った祿物を、「石山院」で労のあった案主、領、雇工等の間で分配する際、錢貨に換えることによって現物価値を細分化し、「班給」しているのである。

以上、布施支給における錢貨機能とその効果について考察を行ってきたが、天平十八年以降、錢支給による一本化は崩れ、間写では布又は錢を、後写一切経では絶をという支給品目の混在化の状態になることについて、これがいかなる原因によるものかは不明であり、写経所ないしは造東大寺司の内的財政要因によるものか、それとも造東大寺司写経所のおかれた当時の律令国家財政全体からくる要因によるもののかは、今後解明されるべき問題であるが、おそらくは、同時に一切経が三セット、

その上に問答も行われたことにより、莫大な布施支給額がみこまれたことに対し、錢貨財源のみでまかなうとなると負担が大きくなり、第一章（三）で述べたように律令国家の錢貨財源には限界があることから、現物財源からの支給に戻らざるを得なかったものと思われる。

## おわりに

八世紀の錢貨については従来国家財政上の支払い手段として有益であった点にその財政史的意義が認められていた。確かに律令国家によって発行された錢貨は交換経済において用いられる為と言うより、財政上の要求から発行されたものである点は事実である。本論はこのような要求から生まれた錢貨が実際の運用においてはいかに機能しているか、と言う現象面の考察から錢貨の性格・機能を探り出そうと試みたものである。即ち、京内官司における財政運営においては現物を財源とし、錢貨を交換手段としている。現物は代価財源としての役割しか果たしておらず、錢貨は交換手段として機能している唯一の存在であった。そしてこの交換手段としての機能にこそ、錢貨の本源の機能を見いだせたのである。次に、律令国家が錢貨発行の政策目的の一つとしてもくろんだ功直支給の場において、実際に錢貨を功直に充てることによって小額単位価値の支給が可能になり、短期雇用や能力別差額支給を行って柔軟で合理的な労働力確保が行われ得た点に小単位価値としての錢用効果が認められることを指摘した。そして又、錢貨運用の実際例として考察した写経所における布施支給については、現物で仕事量を換算する際、単位量に満たず、

現物価値を損ないかねない様な分割の困難さを伴う仕事量の処理に小単位価値の錢貨を用いることが効果的であった点を指摘した。

いずれの場合にも、実際の錢貨運用の場では小単位価値物として現物では不可能な錢貨運用独自の効果が挙げられており、事業運営上の支払い手段としての機能の他に、このような交換手段としての機能から派生した、価値の細分化の機能に依存する運用目的が認められるのである。

ところで新錢発行時における詔等で、律令国家が発行の目的として挙げているところを見ると、

①・以穀六升<sup>上</sup>当錢一文。令百姓<sup>中</sup>交関各得<sup>上</sup>其利<sup>上</sup>。

（『続日本紀』和銅四年五月己未条）

②・詔曰。夫錢之為用。所以通財貿易<sup>中</sup>有<sup>上</sup>无<sup>上</sup>也。当今百姓。尚迷<sup>上</sup>習俗<sup>上</sup>未<sup>上</sup>解<sup>上</sup>其理<sup>上</sup>。……以下略。

（同和銅四年十月甲子条）

③・詔曰。諸国役夫及運脚者。還郷之日。粮食乏少。無由<sup>上</sup>得<sup>上</sup>達<sup>上</sup>。宜<sup>上</sup>割郡稻<sup>上</sup>別貯<sup>上</sup>便地<sup>上</sup>。隨<sup>上</sup>役夫到<sup>上</sup>任<sup>上</sup>令<sup>上</sup>交易<sup>上</sup>。又令<sup>上</sup>行旅人<sup>上</sup>必齎<sup>上</sup>錢<sup>上</sup>為<sup>上</sup>資<sup>上</sup>。因息<sup>上</sup>重担<sup>上</sup>之勞<sup>上</sup>。亦知<sup>上</sup>用<sup>上</sup>錢<sup>上</sup>之便<sup>上</sup>。

（同和銅五年十月乙丑条）

とあり、又、万年通宝発行時には、

④・勅錢之為用。行之已久。公私要便莫<sup>上</sup>甚<sup>上</sup>於斯<sup>上</sup>。……以下略。

（同天平宝字四年三月丁丑条）

とあり、いずれにおいても「用錢之便」が「交関」、「交易」にある点が明示され、交換に用いることすなわち交換手段としての利点が現物と対比して示されているのである。このように錢貨は交換手段として法定



価値が定められるのであるが、

⑤・令<sub>三</sub>天下百姓以<sub>三</sub>銀錢一<sub>一</sub>。当<sub>三</sub>銅錢廿五<sub>五</sub>。以<sub>三</sub>銀一兩<sub>一</sub>。当<sub>三</sub>一百錢<sub>一</sub>。行<sub>用之</sub>。  
〔続日本紀〕養老五年正月丙子条〕

というように銀一兩で錢百文という換算率によって示される価値決定から、

⑥・詔曰。市頭交易。元來定價。…更量<sub>三</sub>用錢便<sub>一</sub>。欲<sub>レ</sub>得<sub>三</sub>百姓  
潤利<sub>一</sub>。其用<sub>三</sub>一百錢<sub>一</sub>。当<sub>三</sub>一兩銀<sub>一</sub>。…（以下略）

（同養老六年二月戊戌条）

として示されるごとく、銀一兩につき錢二百文と換算率を変更することにより、錢貨の価値はそれまでの二分の一に切り下げられ、より細分化された価値を付せられたのである。そして錢貨とはこのように小単位の価値をもつことが、まさに「用錢之便」であると律令国家によって意図された交換手段であったのである。このような律令国家の発行時における発行目的は本論が明らかにしてきた、帳簿類にあらわれる錢貨の機能、即ち小単位価値の交換手段として他の現物財源では果し得ない、価値の細分化を可能にし、財政上大きな効果を挙げているという事実と一致しているのである。

八世紀における錢貨の鑄造貨幣としての質を考えると、和同開珎の発行当初は銅錢としての質もよく、また銅錢に先立ってわずかに流通していた銀錢などいづれも素材価値の認められる秤量貨幣とも言うべき錢貨であった。しかし八世紀も時代が下るにつれて発行者側の事情から質が悪化し、素材価値の伴わない秤量貨幣へと転化していく。また当時の一般社会における流通経済の状況下においては錢貨が普遍的に流通して

いたとは考えられない。そのような中で錢貨が、発行当初の律令国家の目的通りに、本論で考察して来たような厳然たる交換手段としての機能を実現している状況が、正倉院文書の財政関係の帳簿に残されていることはまさに、錢貨が律令国家財政がスムーズに運営されるために、京内周辺地域においていかに政治的強制力によって流通せしめられていたものであったかと言う、八世紀における錢貨の性格を如実に物語るものである。

交換という行為を考えた場合、物と物との交換においては、全くの等価で交換することはありえず、需要者が価値の削減を覚悟の上で供給者が所有する自らの必要とする物を価値は大きいが自分にとって効用の低いものと交換するのである。「一般的等価物」呼ばれるものが存在したとしてもそれが物品であるならば、価値の細分化に限界があるのであり、厳密に等価交換することは不可能である。そのような状況のもとにおいて律令国家が交換手段を独自に設定し、小単位の価値を付与したのは、交換において価値表示が正しくなされ、限りなく等価交換に近付くことを可能にする為であり、それによって合理的な財政運用を可能ならしめる為であったのではないだろうか。こう考えられるとすれば、律令国家にとっては錢貨発行の目的からして錢貨の流通は律令中央官司の周辺のみで十分目的果していたことになるのである。

八世紀における錢貨の機能と性格は律令国家体制によって経済が把握されている間は機能を実現したが、律令国家体制が、成熟し始めた流通経済を把握し切れなくなると、八世紀における律令国家体制内のみで有効であった錢貨も機能し得なくなるのである。八世紀における錢貨とは

まさに歴史上の閃光のごとく一時的に非常に発達した機能を担って流通した存在であった。

古代の銭貨については、はじめにも述べた通り、従来、国家の支払い手段としての財政史的意義付けがなされ、それが銭貨の歴史的評価の全てであるかのような観がある。しかし、我國の正倉院文書は世界的にも例を見ない生の、質量ともに豊富で貴重な帳簿群・文書群である。その中に銭用帳簿又は銭用記載のある文書も相当量含まれているのであり、八世紀における銭貨についてもさらに一層新しい事実の解明が進められることが可能であると思うし、又進められなければならない。その点こそが本稿の目的の原点であった。ポランニーは貨幣の本源は交換手段とは限らないと言う。しかし、私の分析したかぎりでは日本古代の八世紀における銭貨の本源的功能は少なくともやはり交換手段であった。本論では長々と駄文を連ねてこの極めて単純な事実を述べたに過ぎない。しかし、古代における貨幣経済の分析の一端はここから始まるのである。

## 注

- (1) 「律令財政」(岩波講座『日本歴史』古代3、一九六七年所収)。
- (2) 「律令国家と銭貨」(『日本史研究』一二三号、一九七二年)。
- (3) 『日本古代共同体の研究』第六章一節「共同体と手工業家族」(一九六〇年初版)。
- (4) 『日本古代都市論序説』第三章二節「奉写一切経所の財政と銭貨」。

第三章補論1「八・九世紀における出挙銭の存在形態」(一九七七年初版)。

(5) 鶴田満彦編『入門経済学』第二章二節「貨幣の成立」(有斐閣新書、一九七九年初版)。大内力経済学体系第二巻『経済原論 上』第一篇第二章「貨幣」(一九八一年初版、東大出版会)。資本論体系2『商品・貨幣』第一篇第三章「貨幣または商品流通」(一九八四年初版)。二瓶敏執筆「貨幣」(『万有百科大事典12 経済・産業』小学館、一九七五年初版)。

貨幣の諸機能については様々な経済学者によって様々な機能が分類・列挙されている。そして、いずれの機能が本源的功能であるとみなし、いずれの機能がそこから派生又は付随したものであるとみなすかも各経済学者によって説の分かれるところである。例えば金属主義説をとる学者は、貨幣がそれ自身価値をもっていることから他の商品の価値を測定しうる機能を果し得るものである為、貨幣の本源的功能を価値尺度に求め、その他の流通手段・価値保蔵手段・支払い手段、と言った諸機能はそこから派生的に導いて来るのである。イギリスの古典派経済学やマルクス経済学はこの学説を採る。

これに対し、名目主義説をとる学者は、金属主義の主張する、素材価値による一般的価値尺度機能を否定して、貨幣の本質を抽象的功能——すなわち交換ないし流通手段に求める。代表的な学説としてはF・クナップの国定学説が貨幣は素材には関係なく国家の法制だけによって通用力を有するとし、貨幣の本質を流通手段に求めている。こちらは主として二十世紀に入ってからドイツを中心に盛んになったもので

ある。このように貨幣の機能については諸説があるが、総じて最も一般的に抽出される貨幣の機能は、「交換手段」「支払い手段」「価値貯蔵（蓄蔵・退蔵・保蔵）手段」「価値尺度」の四つである。又、それぞれの考察の対象となる貨幣が違えば、その貨幣の生じて来た状況等の相違から貨幣の機能も違って来るはずである。

(6) 貨幣の定義も諸説別れるところであるが、ここでは『資本論』第一篇第三章「貨幣または商品流通」における貨幣の定義による。

(7) 本論では日本古来の銭貨が持つ呪術的側面には触れず、流通経済上の機能にのみ言及することにする。

(8) 写経所の予算システムについては、横田拓実「天平宝字六年における造東大寺司写経所の財政」（『史学雑誌』72—9、一九六三年）、吉田孝「律令時代の交易」（『日本経済史大系1 古代』一九六五年、のちに『律令国家と古代の社会』一九八四年に一部修正して再収）、井上薫『奈良朝仏教史の研究』（一九六六年初版、吉川弘文館）に詳しく紹介されている。

(9) この二部大般若經寫事業についてはすでに多くの研究がある。主要なもの以下の通りである。松平年一「官写経所の用度綿売却に関する一考察」（『歴史地理』62—6、一九三三年）、横田拓実・吉田孝前掲注（8）論文、栄原永遠男「奉写大般若經所の写経事業と財政」（『追手門学院大学文学部紀要』14、一九八〇年）他。

(10) 節部省から新たに収納された「用度物」の他、「奉写十二観頂經料」の残物、白米六斛、塩一斗、海藻三十斤、滑海藻二十六斤が造物所より、又「奉写石山大般若若料」の残物、海藻六十斤、滑海藻六十斤、

小擬菜四籠も収納された（5—301他）。

(11) この三つの現状は表1の通りである。

「A」と「B」の関係については、装潢の仕事が閏十二月七日から開始されている（16—137）ので実際の写経体制がその頃から開始し、銭貨運用も閏十二月六日から行われた為に「売料綿」による銭貨の獲得と同時に銭貨用途も記す帳簿に切り換えられたものと思われ、「A」帳の閏十二月十一日以降が散逸してしまったわけではない。又、閏十二月六日の前と後で財政上時期的区別が意識されていたことは、収納帳の試案とも言うべき、「二部般若雜物納帳」とは多少まとめ方の異なった文書の断簡に、「閏十二月六日以往、附人々売綿直如件」という項目でまとめられていたことから知られるのであり、「A」帳と「B」帳の示す様に、閏十二月六日以前と以後では多少綿のさばき方が異なっているのである。尚、栄原前掲注（9）論文では、写経事業全体の進行過程を四段階に分け、閏十二月六日から十日までを第二段階とされている。

(12) 栄原前掲注（9）論文で、調綿の割り当てが一段落し、閏十二月六日以後二人の案主に二千屯分の処分の責任が移管されたと指摘されている。

(13) 栄原前掲注（9）論文が事業準備期間とされる第一段階に当たる。

(14) 正倉院文書においては物品を用いて直接必要物資と交換している例は全く見当たらない。後出注（37）参照。

(15) 符 難波使社下月（足）弓削伯万呂等  
一米黒十五石 白随價得 海藻三百連 塩二百果大小豆麦等先如

表1  
「二部般若雑物納帳」

| 断簡             | A               | B                   | C                        |
|----------------|-----------------|---------------------|--------------------------|
| 正倉院文書<br>中の所在  | 続々修<br>4帙8      | 続々修<br>41           | 続々修<br>43帙20             |
| 写真<br>番号       | ①               | ⑧                   | ②                        |
| 大日本古文書<br>中の所在 | 5<br>300<br>302 | 5<br>302<br>304 L.1 | 16<br>121 L.1<br>123 L.7 |
| 記載内容           | 十二月十九日<br>同 廿一日 | 十二月廿七日中<br>同 廿七日中   | 十二月廿七日中<br>同 廿七日中        |

○ABCは現在正倉院文書中に別個に編成されているが、特徴的な連続するシミのあることよって、三断簡八紙は全て接続することが確認できるとも背は空。

○右端に軸。

雑物納帳「二部般若」

○又、収納帳案の断簡とでも呼ぶべきものが、  
(5-306) 12/19、続々修4-21②と、  
(16-71) 12/19、続々修39-4②に、  
見られる。

「売料綿下帳」(A)

| 断簡             | 続々修<br>43帙16       |
|----------------|--------------------|
| 正倉院文書<br>中の所在  | ⑦                  |
| 写真<br>番号       | ⑧                  |
| 大日本古文書<br>中の所在 | 16<br>76 L.3<br>78 |
| 記載内容           | 十二月廿一日<br>同 廿八日    |

「売料綿并用度銭下帳」(B)

| 断簡             | 続々修<br>43帙16            |
|----------------|-------------------------|
| 正倉院文書<br>中の所在  | ②                       |
| 写真<br>番号       | ③                       |
| 大日本古文書<br>中の所在 | 16<br>80 L.10<br>82 L.6 |
| 記載内容           | 十二月十一日中<br>同 十四日中       |

○「二部般若雑物納帳」・「A」帳・「B」帳(⑥は除く)とも背は空。

員、自余海菜随買得、直二貫以下限、

折薦随得耳、又細繩二十了若在

右、得進上状、具知事趣、但綿者、上件物彼銭限買取、即返船

乗、月十日以前入京、以不得延廻、又雖直六十三四文充買之、

非五文已上者、不得売却、今具状、附廻使弟乙万呂、以符、

主典安都宿祢

天平宝字六年閏十二月卅日

(16-109)

(16) 飯高息足に關しても、

謹恐惶請処分

所賜綿卅連 先日仰給直屯別六十五文者 且進納銭拾肆貫  
今所謂屯別充六十文可申状

右、縁先日宣、如数將進思食、遣外国交易、附不能人、每物売

減、不堪望心、仍望請垂鴻恩寵、依所請状領納幸甚、今所遣銭、

依壘田来、隨宣旨状、追可奉上、子細事趣、含使師口状、不勝

至憑、伏乞処分、

天平宝字七年二月廿九日 飯高息足

謹上 佐官尊 左右辺

(16-340)

という陳情が知られ、かなり困難な状況が窺われるのである。

(17) 十二月二十日条においては大量の綿の代価を即受理しているが、

いかなる事情があつたかは全く不明である。

(18) 葛井判官は葛井連根道でこの当時、正六位上造東大寺司判官で造

東大寺司木工所及び造瓦所の別当の任にあつた。また美濃主典は、美

濃連奥麻呂でこの当時正六位上造東大寺司主典で、葛井連根道とともに

に造東大寺司木工所の別当の任にあった。

(19) そして推測に過ぎないのであるが、「A」帳に見られる写経所の下級官人の行い、即ち綿その他租布、辛檀など各々担当した分によって銭貨を獲得する為に人々の間を奔走しているのはいわば勧進的行為であり、又写経所から現物を受け取って銭貨に交換する側の行為は知識的な半ば強制的寄付行為であったのではないだろうか。そこには単なる綿の売買という行為の他に、写経事業に付随する宗教的な意味合い、すなわち勧進のような仏の功德の分配と言うような性格によって営まれていたのではないだろうか。だとすると、このような財政過程というのは写経事業という特殊な性格故の写経所独特の経済活動であったかもしれない。つまり、ここでの分析がどこまで一般の律令官司財政に敷衍できるかは疑問の残る点である。

(20) ここで注意すべきことは、京内、東西官市で売却された形跡が見られないことである。「B」帳その他二部大般若経関係の文書には物資購入・調達においては市領の活躍が目立つのであるが、現物財源の売却に関与している形跡はない。また表2からも官市で売却した可能性があると考えられる証拠はない。このことについて後出注(32)で詳しく触れる。

(21) 「奈良時代に於ける法華寺の造営」(『日本建築史の研究』一九四三年所収)。又福山氏の復原に対し、岡藤良敬氏が二・三、問題点を指摘しておられる(『日本古代造営史料の復原研究』第六章造石山院所解案《秋季告朔》、一九八五年)。

(22) 福山氏の復原によると、首部約三三紙(七五〇数行)が残っている

るが漆の記載の中途から欠逸しており、その後に釘・桧皮・石灰・炭・米等々の記載が存続したであろう点が指摘されている。

(23) 文書中計算間違いがあり、「造金堂所解」の「院中平章売雜物價」の総額として記される「三百一貫八百七十五文」は「三百一貫八百六十五文」が正しく、又、冒頭の収納総額として記される「一千六百四十九貫七百十三文」は「一千五百四十九貫七百十三文」が正しい。この様に若干の計算間違いがあるものの、現状の「造金堂所解」の冒頭二紙分の銭貨収納に関する記載には、計算上から言って欠落がないものと思われる。

(24) 財源の用途についてみると、表3のとおりである。すなわち、各々、使用価値よりも、交換価値としての利用度が圧倒的に度合を占めているのである。

(25) 各々の項目によれば、「院中平章」によって得られた額はそれぞれ、表4(B)の如くであり、冒頭の銭貨項目の「院中平章」分に記されている各品目からの収納額(A)とかなり違いが見られる。

(26) 葛木大夫即ち葛木戸主の経歴は、天平十七年四月には中宮少進(2—398)、天平勝宝元年八月には紫微少忠(『統日本紀』)、天平宝字二年には坤宮下官(14—63)、翌三年には坤宮大忠(4—189)とそれぞれ史料に見え、坤宮官にゆかりの深い人物であったことがわかる。この葛木大夫からとされる納入額は非常に大きく、個人からの私的寄付とは思えないので、おそらく彼は奉者として史料に記されたとと思われる。

(27) 以上、(1)(2)に関しては福山氏によって光明皇后との関係

表3

|       | 収 納 (用)          | 交 換   | 使 用                | 交換割合 |
|-------|------------------|-------|--------------------|------|
| 綿     | 601匹5丈3尺7寸(同左)   | 47匹3丈 | 128匹1丈5寸<br>2匹8尺7寸 | 78%  |
| 糸     | 805鈎2兩1分1朱(同左)   | 803鈎  | 2斤2兩1分1朱           | 99%  |
| 綿     | 1564屯(1558屯)     | 1008屯 | 550屯               | 64%  |
| 調 布   | 232端(200端)       | 149端  | 51端                | 74%  |
| 薄 質 布 | 20端6尺1寸(18端6尺1寸) | 0端    | 18端6尺1寸            | 0%   |
| 庸 布   | 96段(96段)         | 0段    | 96段                | 0%   |
| 租交易布  | 432段(426段)       | 380段  | (146段)             | 89%  |

表4 院中平章分についての  
銭貨項目記載と各用途項目記載の相違

| 品 目  | 銭貨項目の収納記載 |          | 各用途項目の記載 |          | B-A      |
|------|-----------|----------|----------|----------|----------|
|      | 量         | 直銭(A)    | 量        | 直銭(B)    |          |
| 調 綿  | 28匹3丈     | 19貫545文  | 163匹3丈   | 105貫850文 | 86貫305文  |
| 糸    | 313鈎      | 45貫580文  | 323鈎     | 39貫810文  | - 5貫770文 |
| 綿    | 341屯      | 22貫106文  | 438屯     | 26貫988文  | 4貫882文   |
| 調 布  | 92端       | 63貫834文  | 149端     | 42貫550文  | -21貫284文 |
| 租交易布 | 352段      | 33貫899文  | 380段     | 39貫 80文  | 5貫181文   |
| 計    |           | 184貫964文 |          | 254貫278文 | 69貫314文  |

※ 銭貨項目にはここに掲げたものの他にも収納記載があるが、用途項目の記載が欠落し比較できないため省略した。

から述べられている。

(28) ここで見られる封戸についてはどのような性格のものか不明であるが、藤井一二氏は金堂の造営に充てられた封戸は、阿弥陀浄土院の造営の為に臨時に設定された可能性が強いと推定されている。(『法華寺の成立と寺領』(『ヒストリア』63、一九七三年、のちに『初期荘園史の研究』に収録))

(29) 「丹波宅」について吉田孝氏は造東大寺司木工所の財政担当官・丹波広成の宅であった可能性を指摘しておられる(前掲注(8)論文)。  
(30) 吉田前掲注(8)論文。吉田氏は「丹波宅」が売却を請け負う、さらに端的に言えば、「丹波宅」が一定額で購入するという関係にあった、と推測されている。

(31) 『図説日本文化史大系3 奈良時代』132頁「商業と交通」(岸俊男執筆、小学館、一九五六年初版)

(32) 吉田氏は、律令官司が交易を行う際、京内官市との関与が希薄であったとされるが、「造金堂所解」における「院中平章」をこのように解釈すれば、市とのつながりを想定することも可能になるのではないだろうか。またこのように、銭貨交換の為に余剰物資の放出においても、或は必要物資の購入において市領・市庄の利用は勿論のこと「司裏」における購入においても官司財政と市とがかならずやかかわりがあると考えられるとすれば、(一)節で見た二部大般若経書写事業における綿の売却の際、綿が官市で売却された形跡が全く見られないというのは、吉田氏が指摘されるように律令官司財政と東西官市との関係が希薄であったと言うよりも、むしろ写経所における綿の頒下に、

特殊な宗教的意味、すなわち注(19)で指摘したようなことが考えられるのである。

さらに余談になるが、吉田氏は「二部般若納帳」(16—121)と、その納帳断簡(16—129)の違い、即ち前者では東西官市で一括して購入されているように記載されている品々が、後者では「司中」で買われており、このことから他の例で市で購入されたように記載されているとしても実際にはそうとは限らないであろうとされ、東西官市との関係の希薄なことの根拠のひとつとされるが、「司中」であつても先程から見ているように市人が関与している為に「二部般若納帳」では市買のものとして一括して記載されたとも考えられる。

(33) 採銅量の不足は、平安中期以降、すなわち皇朝十二銭の代をかさねるほど深刻な問題となっていた。その為、新銭原料銅の入手はあらたに採掘した原料によるのではなく、旧貨の回収・鑄潰しによらざるを得なくなった(『類聚三代格』巻第十四銭鑄事)。これは、ひとつに採銅使の有名無実化から民間私掘が盛んになるなど、政策面での問題にもよるが、採銅の技術上の限界が決定的であつたと言える。すなわち銅鉱石は元来、酸化銅鉱と硫化銅鉱(主として黄銅鉱)に二大別される。酸化銅の処理は、燃料(木炭)とともに過熱すれば銅分だけ容易に析出することができるが、硫化銅のほうは、この方法では精錬不可能である。すなわち含有されている硫化分(金属と化合した硫黄)は、普通に過熱しただけでは除去できないからである。しかるに我国は火山国であるために硫化銅の鉱床は全国に豊富に存在するのに反し、酸化銅の鉱床は比較的に少ない。我国の古代貨幣の原料銅はおおむね

この酸化銅であり、かつその埋蔵量は多くないので、やがて潤渇しはじめ、平安中期にいたつて、政治的理由とあいまって原料銅の貢進が欠滞するに至つた。尚、我国では、その後室町時代になつて、硫化銅の新しい精錬法である「山下吹」が開発され、世界有数の産銅国に転じた。(以上、日本銀行金融研究所編『日本貨幣略史』一九八〇年初版、23頁による)

(34) 栄原永遠男「律令中央財政と銭貨に関する試論」(『社会科  
学研究』2、一九八一年)。

(35) これは「本来的貨幣」の機能のうち、「貨幣としての貨幣機能」、即ち価値の自立的な存在、社会の富を代表するものとしての働きにあたり、そこからは派生的に蓄蔵手段としての機能、支払い手段としての機能が生じるが、ここでは分析対象が「本来的貨幣」とは異なるものであるので、あえて「財源としての機能、財源的機能」という語を用いることにする。

(36) 「実物貢納経済」とは鬼頭清明氏によつて打ち出された概念であり、「中央政府が必要とする物品を、諸国から交換経済を原則として媒介することなく、收取する体制を言う」と定義されている(『日本古代都市論序説』序章第四節注(10))。したがつてここでは鬼頭氏の定義に依拠してこの語を用いることにする。

(37) 横田前掲注(8)論文。事実、正倉院文書中には「物品貨幣」が必要物資との交換に直接用いられている例は見いだせない。そこでは  
布一端 菓子直料買得銀二百七十文 (14—3)

と言うように、必ず銭貨が物品と購入品とを媒介しているのである。

(38) 鬼頭前掲注(4) 論文。

(39) 柴原前掲注(2) 論文。

(40) 現在は、作成当時の原形をとどめず、明治期の整理を経て、その一部が正倉院文書に納められているが、福山敏男氏・岡藤良敬氏・吉田孝氏らによって現在一二断簡、二一紙、計三九六行が復原され、数行分の欠落が確認されている。尚、現状は岡藤氏が整理復原された岡藤前掲書、第十一章表1の1・2を参照。(表8)

(41) この点に関しては、青木和夫氏によって「定雇夫」と「日雇夫」の相違を、「雇人功給歴名帳」(16—178)における両者の区別などによって指摘されている(「雇役制の成立」第四章、『史学雑誌』67—4、一九五八年)。

(42) 又、長期間同一人物を使役し、疲弊させるより短期間ずつ異なる

人物を交替させて使役することの方が労働力としてははるかに能率がよいであろうことも推測されるのである。

(43) 労働量を計る指標として『資本論』などにおいては、労働時間をもって計るのが最もポピュラーであるが、ここではこの細かい等級付けが単に時間差にとどまらずに老若男女その他能力別に行われたことを想定することはいかがであろうか。

(44) 山田英雄「写経所の布施について」(『日本歴史』208、一九六五年、のちに『日本古代史攷』一九八七年に再収)、井上薫『奈良朝仏教史の研究』第六章第三節「写経所の経営」、熊倉千鶴子「写経師の布施について」(『史論』へ東京女子大)32、一九七九年)。

(45) 山田氏の前掲注(44) 論文の論点を紹介しつつ布施の性格を明らかにしておきたい。

表8 (岡藤良敬、註(21)前掲書より転載)

| 所開 | 紙   | 編成別・紙数番号      | 大日本古文書頁(行)               | 行数           | 行数計          | 写本   |
|----|-----|---------------|--------------------------|--------------|--------------|------|
| A  | 第1紙 | 説々修43巻13(表) ㊦ | 4=532<br>4=534(2)        | 26           | 52           | 唐写本  |
|    | 第2紙 | " ㊧           | 4=534(3)<br>4=536(2)     | 26           |              |      |
| B  | 第1紙 | 説修38(表) ㊦     | 5=355<br>5=357(4)        | 28           | 68           | 唐写本  |
|    | 第2紙 | " ㊧           | 5=357(5)<br>5=359(7)     | 29           |              |      |
|    | 第3紙 | " ㊨           | 5=359(8)<br>5=360(5)     | 11           |              |      |
| C  | 1紙  | 説修48(裏) ㊦     | 15=442(1)<br>15=443(8)   | 21           | 21           | 唐写本  |
| D  | 1紙  | 説修48(裏) ㊧     | 15=443(9)<br>15=444(7)   | 12           | 12           | 唐写本  |
| E  | 第1紙 | 説修別集48(裏) ㊦   | 5=360(6)<br>5=361(9)     | 16           | 29           | 唐写本  |
|    | 第2紙 | " ㊦           | 5=361(10)<br>5=362(9)    | 13           |              |      |
| F  | 1紙  | 説修25(裏) ㊦     | 15=450(8)<br>15=451(10)  | 15           | 15           | 唐写本  |
| G  | 1紙  | 説々修43巻9(表) ㊦  | 15=451(11)<br>15=452(12) | 14           | 14           | 唐写本  |
| H  | 第1紙 | 説々修43巻9(表) ㊦  | 15=446(7)<br>15=447(4)   | 10           | 27           | 唐写本  |
|    | 第2紙 | " ㊧           | 15=447(5)<br>15=448(1)   | 9.5          |              |      |
|    | 第3紙 | " ㊨           | 15=448(8)                | 7.5          |              |      |
| I  | 第1紙 | 説々修43巻9(表) ㊦  | 15=448(9)<br>15=449(9)   | 14           | 25           | 唐写本  |
|    | 第2紙 | 修々説43巻9(表) ㊦  | 15=449(10)<br>15=450(7)  | 11           |              |      |
| J  | 第1紙 | 説修別集32(裏) ㊦   | 5=362(10)<br>5=364(12)   | 27           | 83           | 唐写本  |
|    | 第2紙 | " ㊦           | 5=364(13)<br>5=366(13)   | 27           |              |      |
|    | 第3紙 | " ㊦           | 5=367(1)<br>5=369(3)     | 29           |              |      |
| K  | 1紙  | 説修29(裏) ㊦     | 5=369(8)<br>5=371(8)     | 26<br>(25)   | 26<br>(25)   | 大学本七 |
| L  | 1紙  | 説々修43巻9(表) ㊦  | 15=444(7)<br>15=446(6)   | 24           | 24           | 唐写本  |
| 計  | 21  | —             | —                        | 396<br>(395) | 396<br>(395) | —    |



△布施の性格▽ 経生等の布施は、写経・校経・裝潢の仕事量（写経枚数）に応じて支給額の決まる報酬であるが、経師等の多くは史生・舎人として官人組織の中にある。官人の支給されるべき季禄等の給与はすべて位階によるもので、上日数による制限はあるものの、仕事量に応じてその額を受けるものではなかった。その中で写経所における布施支給は特殊なものであった。

△布施の種類▽ 布が最も一般的であった。天平十年頃まで写経料としては絶・布・綿と種々のものを支給していた。又一種類に限らず、二種以上を併せて支給することがあった。天平十一年頃、布もしくは銭に単純化した。又、布か絶で支給する場合、布二端〓絶一匹で換算されたが、銭貨の比率は一对三であるのと同じ支給されるなら絶の方が有利であった。

△布施計算▽ 布を以て写経料を計算することは天平初年以來行われており、布が布施を計る最も一般的な基準であった。銭をもって計ることは天平十一年より天平勝宝三年まで、天平宝字二年、神護景雲四年にそれぞれ見られるが、一定の準則はなく基礎計算は布で行ってそれを銭に換算したと考えられる。《筆者注 山田氏は「最初銭で計算し、それを布に換算することはない」とされるが、確かに換算法としては銭から布へ換算することはいが、最初銭で算出したものを布の支給額へ修正している例はある（天平勝宝二年十二月二十三日付「造東寺司解 申請経師等布施事」（11—439））。》

△布施支給額の変化▽ 布一端的の写経量を見ると、表12の如くである。鹿経で経生四十張、校生一千張、裝潢生四百張で各々一端的の計算であ

る。これは宝亀に至ると同じ布一端に対し、経生八十張、校生一千六百張、裝潢生八百張と二倍の仕事量が必要となった。又、銭による支給額を見ると表13の如くである。経生は一紙五文、校生は一文五紙、裝潢生一文二紙が基本的な換算率である。布の変化と比較すると銭の場合は安定していたと考えられる。しかしこの現象は布に対する銭の変化を考える必要がある。次に布一端的の銭貨の変遷を示すと表14の如くである。以上の三表を総合して考えると、銭による布施額は僅かの例外を除き、天平より宝亀まで変化していない。「この現象は布一端的の価格が漸次上昇していることと布による布施額が宝亀以後変化している事と奇妙な対照を示している。即ち布による布施額は宝亀以後変化するが、銭による支給額が変化しないのであるから宝亀以後の布施額の基準は銭によるものと考えられる。」（以上「」内は原文通り）その結果、布一端に対する写経量は増大した。これは経生等の収入の確保は考慮されずに専ら写経所の立場でなされた計算である。そこには写経所の経済方針の変化、造東大寺司の経済状況の逼迫していた点が示されている。

《筆者注 山田氏は、令規定の調布や、現存する正倉院の調布が一端四丈二尺であるのに対し、写紙四〇張に布一端的の換算率が示されている場合、四〇張に満たない仕事量に対して算出されている布の長さから見て布一端四丈で計算されていることから四丈布の存在を指摘されている（熊倉前掲注（44）論文でもこの説は継承されている）。しかしこの点に関しては古く沢田吾一氏が「計算上の便宜の為」とされたように（『奈良朝時代民政経済の数的研究』一九二七年初版）、写

表12 布一端に対する写経量

[illegible]

(以下の表12～14は、山田英雄、註(44)前掲書より転載)

表14 布一端の錢貨の変遷

[illegible]

表13 錢による布施額

|        |        |        |           |          |          |          |         |         |           |      |   |    |
|--------|--------|--------|-----------|----------|----------|----------|---------|---------|-----------|------|---|----|
| 8      | 7      | 6      | 5         | 4        | 3        | 2        | 1       | 年月日     | 文書名       | 出典   | 経師<br>(付一巻)<br>校生<br>(付一七紙)<br>裝潢<br>(付一七紙) | 題師 |
| 宝龟三・三〇 | 景雲四・九元 | 天平二・七六 | 天平二・九〇・二三 | 天平二・八二・七 | 天平二・八七・二 | 天平二・四六・三 | 天平二・三七一 | 忍坂和麻呂手契 | 金光明寺写経所解案 | 九二五〇 | 二五七   | 二六 |
| 二〇八六   | 六八五    | 一〇三二   | 九四八       | 二五七      | 九二五〇     | 八六〇      | 七五四二    | 写金字経所解  | 写疏所解案     | 二五七  | 二五七   | 二六 |
| 五文     | 二〇文    | 五文     | 八文        | 二〇文      | 五文       | 二文       | 五文      | 五紙      | 五紙        | 五紙   | 五紙  | 二紙 |
| 二紙     | 二紙     | 二紙     | 八紙        | 二文一紙     | 一紙       | 二紙       | 二紙      | 二紙      | 二紙        | 二紙   | 二紙  | 三文 |
|        |        |        |           | 六文一卷     | 三文       |          |         |         |           |      |   |    |

經所における計算操作とも考えられるのであって四丈布の存在はやはり確証できないものと考ええる。尚、文末別表においては布一端四十張の換算のみ明記し、四丈布で計算しているかまでは明記していないが、その点に関しては熊倉前掲注(44)論文表3に詳しい。》

(46)ここで文末別表「A」～「F」の検討に入る前に造東大寺司写經所の写經事業の概略について以下の検討に必要なかぎりにおいての説明を加えておくことにする。

まずその根幹となるのは光明皇后発願による一切經である五月一日經で天平八年九月に開始され、開元釈教目錄による一切經五〇四八巻の書写を目標とした。天平十二年四月で書写が一旦中断するが、天平十三年閏三月から続行、そして天平十五年五月一日からは開元釈教目錄に載せられない章疏の書写にまで範囲を広げ、底本の入手にくるしみながら末年まで続行した。

又、天平十五年からは聖武天皇発願による一切經書写が平行して行われた。こちらは大官一切經と呼ばれるもので、この年の四月に開始するものの年末には中断し天平十八年正月に再開した。十八年再開時にはもう一セットの一切經書写が聖武天皇の発願で始まり、それぞれの名称を大官一切經の継続である前者を先写一切經、後者を後写一切經と呼んだ。先写一切經については史料の残りが少なく実態が不明であるが、先写一切經、後写一切經とも天平二十年頃には書写が終了した。以上三種の一切經(常写、大官(先写)、後写)とは別にその間に「間の仰せ(ままのおおせ)」に従って書写される間写經が行われた。《筆者注「常写」・「間写」とは、前者は官宮写經所の主た

る任務とされた歴代御願の一切經を意味し、後者はそれ以外に、その時々々の皇室(特に光明皇后)の命令による經典の書写を意味した、と蘭田氏によつて定義されている(蘭田香融「南都仏教における救済の論理(序説)——間写經の研究——」(日本宗教史研究会編『救済とその論理』日本宗教史研究4、一九七四年、37頁)。天平勝宝年間までは五月一日經の書写が継続されていたが、天平宝字年間には常写が存在せず、そこで写經事業の主体となった個々の本願經を間写と呼ぶ史料はなく、又天平宝字四年から開始された坤宮御願一切經を常写、それ以外の写經を間写と呼んだ形跡もない。そこで天平宝字年間以降は、一切經以外の書写經典に対し、「間写」なる語は用いずに、「個々の本願經」なる語を用いた。》

天平十七年からは常写と間写の他に玄昉僧正発願による私願經も書写された。

天平勝宝年間になると常写の五月一日經が細々と続行されつつ個々の本願による間写事業が行われた。

天平宝字年間には常写は既に天平勝宝末年に終了しているので写經事業としては個々の本願經の書写が中心となる。但し、天平宝字年間は一切經としては天平宝字四年、光明皇太后の発願により一切經一部三四三三巻の書写が開始したが、光明皇太后の崩御により翌年の周忌御齋会に供することに変更された坤宮官御願一切經の書写があった。

天平宝字末年から神護景雲四年の間には、造東大寺司写經所の機能は内裏の御執經所に移っていた為に写經事業が行われていなかったようである。

神護景雲四年六月からは造東大寺司の下に奉写一切経所で先一部・始二部・今更二部の計五部の一切経が宝龜七年六月までの間に次々と書写された。

以上、造東大寺司写経所で行われた写経事業の概略を簡単に述べた。

(47) 榮原永遠男「初期写経所に関する二三の問題」(『日本政治社会史研究』上、一九八四年)

(48) 蘭田前掲注(46)論文、第3表「天平年間における間写経一覽」No.55に一括されている。

(49) 天平十二年二月の常写の「経師手実帳」(7—423—472)を見ると錢の書き込みに布の書き込みが加えられ、これに対する「写経行事給錢帳」(7—598)を見ると二月分には布で支給されている。又、天平十三年閏三月四月の常写の「経師手実帳」(7—503他)は布で書き込みがあり、これに対する「写経行事給錢帳」(7—511)を見ると錢で支給されている。この二つは錢による支給の一本化以降に布が現れる例外である。

(50) 榮原永遠男「難波之時御願大般若経について」(『大阪の歴史』16—一九八五年)に詳しい。

(51) 難波之時御願大般若経はその名の示す通り「御願経」＝聖武天皇発願であることがわかるが、先写・後写両一切経の場合聖武天皇発願であることを直接示す史料は見られないが、先写一切経の前身である大官一切経については「大官御願」即ち聖武天皇勅願であることが確認でき(福山敏男「再び奈良朝に於ける写経所に就いて」(『大和志』2—9、一九五三年『福山敏男著作集』二・寺院建築の研究 中)一九

八二年に再収)、ゆえに先写一切経は聖武天皇発願と見られ、同時に先写と対になって後写と呼ばれる一切経も、聖武天皇の発願によるものであろう、と推測されている。

(52) 常写と一括して記されるということは、即ち常写と同じ場所と同じ写経生によって書写されていることを意味している。

(53) 山本幸男「天平宝字二年造東大寺司写経所の財政運用」(『南都仏教』56—一九八六年)に詳しい。

(54) 実例を示すと以下のごとくである。

十市倭万呂 写紙五百廿九張 布十三端九尺四寸

准錢三貫四百卅六文 溢幅一匹直六百文 白絶二匹直一貫五百文  
調布十屯々別七十文 庸綿九屯々別六十五文 錢五十二文

能登忍人 造紙三千二百廿張 布八端二尺

准錢二貫九十二文 白絶二匹別七百五十文  
庸綿九屯別六十五文 錢七文

(55) 二千四百卷経の布施支給のうち各人の「准錢」額を諸現物の単位量額で埋め充てて行った残りの半端額が錢で支給されていることは、山本前掲注(53)論文でもふれられているが(第二章注(9))、そこで挙げられた根拠の他に「後金剛般若経料錢下充帳」(14—1)の九月十五日条の安子石勝施料三六五文、九月十六日条の秦太草施料三八九文とある各人の額は布施申請解のそれぞれのもとに記された錢貨の額と一致していることからわかる。

(56) 律令の価値表示体系においては、調庸輪納額・物品価値基準・労働量基準はすべて布によって表示され、常布(一丈三尺布)の単位によっ

て、

◇庸布——常布一単位(一丈三尺)  
(畿内の調)

◇調布——常布二単位(二丈六尺)×二人分——一端 } 輪納單位額  
— 物品價值單位

◇十日で割った二尺六寸が一日の功——労働量基準

と云う関係になり、物品價值基準と労働量基準が布によって総合されひとつの価値体系が構成されていた。しかしこのように布によって調庸・輪納額・労働量を倍数的に表示する律令の価値表示体系は、錢貨発行に伴う、

制。(中略)又諸国所送調庸等物。以錢換。宜以錢五文准布一常。

(『続日本紀』和銅五年十二月辛丑条)

と云う換算率の設定により一功——一文と表示され得ることになった。その為常布は消滅を図られ輪納額單位は正丁一人の調二丈八尺、庸一丈四尺を合成した四丈二尺——一端を輪納額とする新規格へ向かう。こうして常布を基礎とする布による価値表示体系は崩壊し、錢貨による体系に置換された。(以上、吉川真司「常布と調庸制」(『史林』六七—四、一九八四年)に拠る。)

(57) の中には五月一日経内疏二〇六卷分の布施も含まれており、修正案の様に布で支給されたなら、五月一日経が錢以外で支給されている唯一の例外である。

(58) 經典の注・鹿の別、又は紫紙金泥写経の様な特殊な事情によって

支給額が高低するものではない、という意味においてである。

(59) 本文中には特に顕著な例を挙げたために時代がやや下がるものになったが、例えば天平九年二月の「写経校紙并筆墨直錢注文」(7—99)等においても経生に支給されているのが一端の整数倍の支給額しか見えない等、種々の操作例が見られる。

〔付記〕

本稿は一九八七年一月に大阪市立大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部を改稿したものである。

(お茶の水女子大学大学院)

# 別表 写経所の布施物史料

- 〔A〕 五月一日経 天平八年から天平勝宝三年  
 〔B〕 後写一切経 天平八年から天平二十年  
 〔C〕 天平年間写経  
 〔D〕 天平勝宝年間写経  
 〔E〕 天平宝字年間写経  
 〔F〕 自神護景雲四年至宝龜四年写経

## 【凡例】

- 1) それぞれの写経について、布施品目に関する記載のある文書は全て掲げた。  
 2) 文書名は便宜的に『大日本古文书』編年文書に従った。  
 3) 換算率が文書中に明記されているものはそのまま掲げた。換算率が明記されていなくても、書写枚数と布施氏給料から換算率が推定できるものは( )で示した。また、手実帳その他で、布施品目またはその支給料のみがわかって換算率が不明のものは、品目のみ示した。

## 〔A〕 五月一日経

| 年    | 月     | 手 実  | 布 施 申 請 解 | そ の 他   | 換 算 率                                      |
|------|-------|--|-----------|---|--|
| 天平 8 | 9/29始 |  |           |   |  |
| 天平 9 | 2     | 7:145-165(経師) 施, 布, 綿  |           |   | (布1端=綿6屯)                                  |
| 天平10 | 3     |  |           | 経師等造物并給物案<br>7:184-186 布・施, 綿   |  |
|      | 4     |  |           | 校帳<br>7:159-165 布か施   |  |
|      | 5     | 7:130(10)-145(経師)  |           |   |  |
| 天平11 | 7     | 7:130(10)-145(経師)<br>銭(1紙5文)書き込み                                       |           | 校帳 7:381-386 銭<br>・写経司解申八月行事事 銭<br>7:231-236 銭<br>・ # 九月行事事 銭<br>7:236-238 銭<br>※写経行事給銭帳<br>7:598-<br>10年12月 銭<br>11年 2月 銭<br>9月 銭<br>10月 銭<br>12月 布→計銭 | (5紙1文)                                     |
|      | 8     |  |           |   |  |
|      | 9     |  |           |   |  |
|      | 10    | 7:391-404(校生)<br>銭書き込み(5紙1文)   |           |   |  |
|      | 11    |  |           |   |  |
|      | 12    | 7:301-378(経師)<br>布・銭両書き込み(11月～)  |           |   |  |
| 天平12 | 2     | 7:423-472(経師)  |           | 写経行事給銭帳 布<br>7:599  | 経師 校生 装清<br>1紙5文 5紙1文 2紙1文<br>1紙1尺 × 10紙1尺 |
|      | 3     | 7:473-485(装清・校生)<br>2月銭・布両書き込み   |           | 2月 布  |  |
|      | 4     | 銭のみ書き込み  |           | 4月 銭  |  |
| 天平13 | 3     | 7:503-511(経師) 布書き込み  | ----->    | 写経行事給銭注文 銭<br>(装清・経師) 7:511   |  |
|      | 4     | 7:520-523<br>2:286-295(経師) 布書き込み<br>2:283<br>2:283-285(装清・校生)<br>布書き込み |           |   | 同上   |
|      | 5     | 7:537-541<br>7:523-537(経師) 銭<br>24:130<br>7:528-530(校生)                |           | 写経行事給銭注文 銭<br>7:511   | 同上   |
|      | 6     | 7:530-537(経師) 銭書き込み<br>銭書き込み   |           |   |  |
|      | 7     |  |           |   |  |
|      | 8     | 24:131-143 銭書き込み   |           | 写経行事給銭注文 銭<br>(経師) 7:601<br>(装清) 7:511-512  |  |
|      | 9     |  |           |   |  |
|      | 11    |  |           |   |  |
|      | 12    | 11:588-598 銭   |           |   |  |

| 年    | 月  | 手 実   | 布 施 申 請 解  | そ の 他  | 換 算 率                                 |
|------|--|---|--|--|---------------------------------------|
| 天平14 | 2<br>3<br>4<br>5<br>6<br>7<br>8<br>9<br>10<br>11 | 2:309-310(經師) 錢<br>8:1-18,54(經師・裝清・校生)<br>8:55-59(經師)<br>8:74-107(經師・裝清・校生) 錢 | 福寿寺写一切經所解<br>8:60-63(完)<br>8:64-66(断) 錢<br>金光明寺写一切經所解<br>8:155-159 錢 | 写經行事給錢注文<br>(裝清) 7:512 錢<br>同上<br>写經行事給錢注文<br>(裝清) 7:512 錢<br>同上 | 同上<br>同上<br>(加ウルニ疏1紙6文)               |
| 天平15 | 4<br>12  | 8:256-264 書き込みなし<br>8:375 錢書き込み   | 24:245-248 錢<br>+8:373-375   |  | 經師 經1紙5文<br>律・論・疏1紙7文<br>校生5紙1文裝清2紙1文 |
| 天平16 | 1<br>7<br>8<br>12                                | 現存せず<br>7:365-387 錢   | 現存せず<br>8:515-516(4)<br>+8:520-524<br>24:283-284<br>+8:516-520 錢     |  | 同上                                    |
| 天平17 |  | 布施を知る手懸かりとなる<br>文書現存せず  |  |  |                                       |
| 天平18 | 1<br>3<br>4<br>6<br>7<br>9                       | 9:142-165(經師・裝清・校生)<br>裏に錢書き込み<br>9:231-241 書き込みなし<br>9:266-271 書き込みなし        | 9:284-285<br>2:539-542 錢   |  | 同上<br>全て疏(1紙7文)<br>(加ウルニ題師1卷3文)       |
| 天平19 | 1<br>3<br>4<br>6<br>9<br>12                      | 9:586-596(經師) 錢   | 9:398-400<br>+397-398 錢<br>9:396-397 錢<br>9:629-637 錢                | ※<br>2月<br>2:679-680 錢<br>(布施申請断簡)<br>8月<br>写疏所解<br>9:485 錢      | (1紙7文)<br>經師1張8文<br>裝清8張1文            |
| 天平20 | 1<br>3<br>4<br>8                                 | 10:153-162 錢  | 10:1-5+12:198-199 錢<br>10:5-6(断簡)<br>3:312-318 錢<br>11:70-71         | 5月   | (1張7文)<br>同上                          |
| 勝宝 1 |  |   |  | 造東寺司解 11:439-447 錢   | 論1張5文 疏1張7文<br>校生5張1文裝清2張1文<br>題師1卷3文 |
| 勝宝 2 | 12   |   |  | 裝清充帳 10:267  |                                       |
| 勝宝 3 | 12   |   | (布施文案)<br>3:528-535 錢  |  | (疏1紙7文)                               |

# 〔B〕後写一切経

| 年 季 | 手 実  | 布施申請解  | 換 算 率  |
|-----|--|--|--|
| 18  | 春<br>9:123-134<br>書き込みナシ   | 9:170-174  | 布→施<br>異筆で施換算の書き込み<br>・布 経師 校生 装清<br>・施 80張1端 1000張1端 400張1端<br>80張1匹 2000張1匹 800張1匹 |
|     | 夏<br>9:108-123<br>書き込みナシ   | 9:416-421  | 施<br>同上<br>(注は60張1匹)   |
|     | 秋<br>9:94-108<br>9:274-276<br>24-392<br>書き込みナシ                   | 2:509-510<br>+2:536-539                              | 施<br>能 経師 校生 装清<br>注 80張1匹 1000張3丈 800張1匹<br>60張1匹<br>(実質的には上に同じ)                    |
|     | 冬<br>9:83-94<br>9:276-279<br>書き込みナシ                              | 2:565-569  | 施<br>能 経師 校生 装清<br>注 80張1匹 2000張1匹 800張1匹<br>60張1匹                                   |
| 19  | 春<br>9:76-83<br>書き込みナシ   | 9:358-361  | 施<br>同上  |
|     | 夏<br>9:402-412<br>9:421-422<br>2-672<br>書き込みナシ                   | 9:412-416  | 施<br>同上  |
|     | 秋冬<br>9:453-466<br>書き込みナシ  | 2:685-689  | 施<br>同上  |
| 20  | 春<br>10:142-153<br>10:168-169<br>10:237<br>書き込みナシ                | 3:65-69  | 施<br>同上<br>(但し、支給されず夏季に繰り越し)   |
|     | 夏<br>10:142-153<br>10:168-169<br>10:237<br>+10:170-171<br>書き込みナシ | ア10:287-291<br>イ 3:91-97<br>ウ24:402-403<br>+3:97-101 | 布<br>天平18年夏季に同じ<br>(注は30張1端、題師は100巻で1端)  |

※なお、9:511天平19年10月30日布施申請後部断簡は先写の布施を知る唯一の手懸かり

# 〔C〕天平年間間写経

| 経 典 名   | 年 月       | 収 載 頁                        | 史 料 名              | 換 算 率  |
|---|-----------|------------------------------|--------------------|--|
| 観心三昧経10巻<br>摩訶般若102巻<br>千字千眼経1巻                             | 天平7.9     | 7:39-40                      | 経紙写紙并給施布案          | 布・施 経師:40紙1端<br>装清:400紙1端<br>(相折布36端充施18端)     |
| ?   | ?         | 7:40-42                      | 経紙写紙并給施布案          | 布 (同上)   |
| 大宝積経18巻<br>法華経20巻<br>円弘章4巻<br>唯識論疏20巻<br>弁中并論疏3巻<br>法华経疏10巻 | 天平7.12    | 7:41-42<br>7:43-44           | 経紙写紙并給施布案<br>写経所啓案 | 布・施 同上<br>(相折布44端充施22匹)                        |
| ?   | 天平9.2.25  | 7:100-102                    | 写経校紙并筆墨直銭注文        | 布 (施もか)  |
| 唯識論疏16巻   | 天平9.10.18 | 7:120-121                    | 高屋赤麻呂(?)写紙并布施啓     | 布 同上   |
| 唯識論疏15巻   | 天平9.12.20 | 7:122-123(A)<br>7:123-124(B) | 高屋赤麻呂写紙并布施啓        | 布・施 (竅数)、綿 (端数)<br>(B)は布で算出したものを修正<br>(A)はその清書 |
| ?   | 天平9.12    | 24:68                        | 写経司等公文             | 布・施・綿  |



| 経典名  | 年月   | 収載頁   | 史料名  | 換算率  |
|--|--|---|--|--|
| 能勢般若經100巻<br>七手千眼經2巻<br>十一面經2巻<br>不空罽索經2巻<br>觀世音經2巻    | 天平10. 2. 8-  | 7:126-130   | 經師等行事手実  | 布・綿 經師:1張1尺<br>裝清:1張1寸<br>校生:1張4分<br>(布・綿両方で算出綿1匹充布1端、<br>但し実際の支給は錢、1紙5文)            |
| 法花經8巻<br>大仏頂經尼經4巻                                      | 天平10. 3  | 7:167-168<br>24:66<br>24:67<br>(7:168)<br>24:66                       | 寫經司雜受書并進書案及返書<br><br>寫經司等公文<br>"   | 布 同上   |
| 大仏頂經2巻<br>弥勒經3巻<br>摩訶摩耶經1巻<br>七卷抄7巻<br>授論10巻<br>梵經經疏2巻 | ?  | 24:65   | 寫經司等公文   | 布 40張1端<br>紫紙4寸充紙1張  |
| 法花經8巻<br>梵天經1巻   | ?  | 24:64   | 寫經司等公文   | 布  |
| ?  | ?  | 24:64   | 寫經司等公文   | 布  |
| ?  | 天平10. 7  | 24:63   | "  | 布  |
| 注寫大仏頂經11巻  | 天平11. 3  | 2:159-160   | 寫經司啓   | 布 40紙1端<br>裝清10紙1尺   |
| 法花經8巻<br>灌頂經13巻  | 天平10. 8?<br>天平10. 8. 2   | 7:184-186<br>24:64  | 經師等造物并給物案<br>寫經司等公文  | 布 928端 (綿并成布)  |
| 法花經792巻  | 天平11. 4. 15  | 2:161-166   | 寫經司啓   | 布→錢 (布から換算) 布が本義か<br>「計錢」(1端=200文)<br>一人目の大宅真立の項のみ「応給<br>布……若錢」, 他は錢                 |
| 法花經8巻  | 天平11. 4. 25  | 2:166-167<br>24:69  | 寫經司啓<br>寫經司等公文   | 布 經師1張4尺、裝清1張2寸(紫紙<br>ゆえ高給) 採消し錢に修正1紙10文   |
| 方広經3巻  | 天平11. 7  | 7:228-229<br>7:511  | 寫經司告朔解申七月行事  | 錢  |
| 千手經1000巻   | 天平13. 7-9  | 7:542-  | 經師校生等手実帳   | 錢 經師1紙5文<br>裝清400紙200文<br>校生5紙1文   |
|  | 天平13. 10-12<br>天平14. 2-4<br>天平14. 5<br>→ 2. 2-5. 30<br>天平14. 6-7<br>天平14. 10-11<br>→ 6. 1-11. 30 | 7:578-<br>8:22-<br>8:40-<br>8:107-110<br>8:67-<br>8:140-<br>8:150-153 | 經師校生等手実帳<br>寫千手經經生等手実案帳<br>寫千手經經生等手実案帳<br>福壽寺寫一切經所解案<br>寫千手經經師等手実案帳<br>寫千手經經師等手実案帳<br>金光明寺寫一切經所解 | 錢 經師1紙5文<br>裝清400紙200文<br>校生5紙1文<br><br>錢 同上<br>錢 同上<br>錢 同上<br>錢 同上<br>錢 同上<br>錢 同上 |
| 法花經4部32巻<br>最勝王經10巻                                    | 天平14. 2-(?)  | 8:60-63   | 福壽寺寫一切經所解(布施申<br>請(五月一日經と合算)以下<br>天平17年までこれが普通)  | 錢 同上   |
| 法花經50部<br>法花授釈<br>(玄防布經)                               | 天平15. 8-12   | 8:230-256<br>(8:364*)<br>8:352-359                                    | 經師并校生手実帳<br>經師裝清校生等布施充帳  | 錢 1紙5文<br>錢 (同上)   |
| 天平15年の間寫   | 天平15. 10   | 8:264-271<br>24:245-248<br>+8:373-375                                 | 手実(經師・校生)<br>布施帳(常写と一緒)  | 記載なし<br>錢 同上<br>但し疏料1紙7文   |
| 天平16年前半の間寫<br>(正月~7月)                                  |  | 8:437-450   | 經師等行事手実帳<br>(布施帳現存せず)  | 記載なし   |
| 天平16年後半の間寫<br>(8月~12月)                                 |  | 8:515-516L4<br>+8:520-524<br>24:283-284<br>+8:526L5-520<br>2:365-387  | 寫疏所解(布施申請)<br>「不用」 上と同内容<br>寫疏所解(手実、常写・間寫<br>を一括しているものの一部)                                       | 錢 同上<br>但し 鹿1紙5文 疏1紙7文<br>錢<br>錢   |

[illegible]

【D】天平勝宝年間間写経（一部天平20年を含む）

| 経典名  | 年月日   | 所在   | 文書名  | 換算率   |
|--|---|--|--|---|
| 法花経1部8巻<br>阿彌陀經2巻<br>最勝王經1部1巻<br>觀世音經2巻  | 天平20. 7. 16   | 10:314-317   | 写書所解(用度申請)   | 銭 経師1張5文 装清2張1文<br>校生5張1文 題師1巻3文<br>※銭貨項目全体に「止」とあり  |
| 百部最勝王經<br>(天平20. 7-10)   | 天平20. 10. 7<br>天平20. 10. 13<br>天平20. 10. 13   | 3:118-122<br>10:267-268<br>10:439-440  | 写経所解(布施申請)<br>写一切経所装清紙充帳<br>写経所解案(校生のみ)                                      | 布 経師1部4端 装清388張1端<br>校生970張1端 表紙400張1端<br>題師100巻1端<br>布 (同上)<br>布 上を修正したもの                  |
| 金字最勝王經10巻  | 天平20. 10. 25  | 3:127-128  | 写経所解(布施申請)   | 銭 経師1張10文 校生1張2文<br>校生5張1文 装清1張5文<br>題師1巻5文 (金字ゆえ高給)  |
| 寺花厳疏   | 天平20. 10. 20<br>感宝1. 4. 29  | 10:453-456<br>10:448<br>10:631-635<br>10:635-637<br>10:637-640<br>10:615   | 写経所解(布施申請)<br>写花厳疏疏師等手実帳<br>写疏所解案(布施申請)<br>写疏所請布施文案<br>経師等布施文案<br>花厳疏疏師装清手実帳 | 銭 同上(但し、疏料として経師1張7文)<br>銭 書き込みあり<br>銭 同上(但し、題師1巻3文)<br>銭 同上<br>銭 書き込みあり                     |
| 教護身命經100巻<br>(天平20. 6-)<br>仏說准頂梵天神索經2巻<br>理趣經1巻<br>多心經768巻<br>十一面經11巻<br>石造仏傳功徳經2巻<br>浴像功徳經2巻<br>喜室經2巻<br>孟蘭盆經2巻 | 天平20. 6. 27-?<br>天平20. 8. 2-?<br>天平20. 10. 5-?<br>天平20. 10. 8-?<br>天平20. 11. 29-?<br>天平20. 11. 30-<br>天平20. 11. 30-<br>天平20. 11. 30-<br>天平20. 11. 30- | ①10:588-592<br>②10:592-597<br>③10:597-601<br>④10:602-604<br>⑤10:604-607<br>⑥10:609-612<br>⑦10:612-614<br>⑧11:477-482<br>⑨3:471-475<br>⑩3:478-482 | 経師布施申請帳案   | 布 経師40張1端 校生500張1端<br>装清400張1端 題師100巻1端<br>※ ⑦は紙計あり<br>⑤は題師の書き加え分のみ<br>布記載の上に「買銭充」云々<br>とある |
| 法花経1部8巻<br>藥師經7巻   | 天平20. 3. 25-<br>勝宝1. 12. 9-   | 上記の③~⑩<br>に加わる<br>24:591-592   |  | 布 同上  |
| 最勝王經   | 勝宝1. 8  | 11:48  | 私願經等勘帳(端裏)<br>(造紙功食料注文)  | 銭 1文2紙(装清4人分)   |
| 因明論疏1部3巻<br>法花経疏2部22巻<br>大恵度經疏1部6巻   | 勝宝1   | 3:312-318<br>(常疏と一括)<br>11:70-71   | 東大寺写一切経所解<br>(布施申請)<br>上の案文  | 銭→但しこの時点で支給されず<br>(後出)  |
| 海竜王經10部40巻   | 勝宝2. 8. 6   | 11:171-173<br>11:361-363   | 写経紙筆布施充帳<br>写書所解案(布施申請)  | 布 書き込み<br>布 (同上、但し題師1巻4寸)   |
| 仁王經疏100部300巻   |   | 11:201-223<br>11:455-457<br>11:380-384   | 写仁王經疏上帳「古案」<br>写経所解(布施申請)<br>写書所解案(「」)                                       | ? 銭<br>銭 人名の上に布の端数の数字か  |
| 大般若經600巻   | 勝宝2. 6<br>勝宝2. 6<br>勝宝2. 6<br>勝宝2. 6<br>勝宝2. 10. 12   | 11:280-284<br>11:285-287<br>11:288-294<br>11:295-300<br>3:463-468  | 写書所解案(布施申請)<br>写書所解(「」)<br>写書所解案(「」)<br>写書所解案<br>造東大寺可解                      | 布 (同上)<br>布 (同上)<br>布 同上(但し、題師100巻1端)<br>布 同上<br>布 同上                                       |
| 法花経100部  | 勝宝2. 7. 16<br>勝宝2. 7-   | 11:324-330<br>11:332   | 写書所解(用度申請)<br>装清校生手実帳  | 布 同上<br>布 書き込み  |
| 阿含經1部197巻  | 勝宝2. 8. 20  | 3:415-419<br>=11:367-370   | 写書所解(布施申請)<br>写書所解案(「」)  | 布 同上<br>布 同上  |
| 花厳經惠蘭師疏  | 勝宝2. 8  | 3:419-422<br>11:380  | 写書所解(布施申請)<br>(冒頭新聞)   | 銭 同上(但し、疏生料1張7文)  |
| 涅槃經義記疏   | 勝宝2. 8  | 3:423-425<br>=11:376-379   | 写書所解(布施申請)<br>写書所解案(「」)  | 銭 同上(但し、疏生料1張7文)<br>銭 同上  |

| 経典名   | 年月日                                | 所在   | 文書名  | 換算率  |
|---|------------------------------------|--|--|--|
| 大般若理趣分1巻<br>最勝王経2巻<br>金剛三昧本性清浄<br>不壞不滅経1巻                     | 勝宝2. 8<br>勝宝3. 2. 7                | 11:371-374<br>11:475-476                       | 造東大寺司解案<br>(用度申請)<br>造東寺司案<br>(追加用度分請求)                    | 布 経師1尺1紙 装清1寸1紙<br>校生4分1紙<br>布 (同上)                          |
| 大品経疏  | 勝宝2. 8                             | 11:374-376                                     | 写書所解(布施申請)   | 銭 同上(但し、疏生料1張7文)   |
| 弥勒経3巻<br>阿彌陀経1巻<br>寿延経1巻                                      | 勝宝2. 11. 8                         | 11:421-422                                     | 写書所解案(用度申請)  | 布  |
| 成唯識論疏1部16巻<br>因明論疏1部3巻<br>法花経疏1部10巻<br>法花経疏1部12巻              | 勝宝2. 12. 23                        | 11:439-447<br>(常疏と一括)                          | 造東寺司解案<br>(布施申請)   | 銭 同上(申請したものに布で修正書き込み)  |
| 寿量品4000巻  | 勝宝3. 8. 12                         | 3:515-521                                      | 写書所解(2059巻分)<br>(布施申請)                                     | 布 経師50張1端 校生1200張1端<br>装清500張1端 題師100巻1端<br>(布1端の整数倍になるよう調整) |
| 法花玄贊第1巻、1巻<br>法花玄贊1部20巻<br>梵網経1部4巻                            | 勝宝3<br>勝宝3. 12. 10<br>勝宝3. 12. 15  | 12:37-38<br>12:182<br>3:528-535<br>+12:183-187 | 写書所解案(布施申請)<br>写書所解案(布施注文<br>装清部分断簡)<br>写書所布施文案<br>(常写と一括) | 銭 経師1張5文 疎生1張7文、<br>校生5張1文、装清2張1文<br>銭 同上                    |
| 最勝王経1部10巻<br>仁王経疏1部2巻<br>六度抄1部6巻<br>梵網経疏1部2巻                  | 勝宝4. 2?                            | 12:220-222                                     | 造東大寺司解<br>(用度申請)   | 布 経師40張1端 疎36張1端<br>校生1000張1端 装清400張1端<br>題師1巻4寸             |
| 六十花嚴経1部60巻  | 勝宝4. 4. 28                         | 12:267-272                                     | 造東大寺司解<br>(用度申請)   | 布 同上   |
| 金光明経1部  | 勝宝4. 7. 17<br>勝宝3. 9. 20<br>欠<br>欠 | 3:582-584<br>12:42<br>12:61<br>12-97           | 造東大寺司解<br>(用度申請)   | 布 (同上)<br>但し装清1丈5尺150張<br>校生1丈1尺 232張                        |
| 法花経1部<br>最勝王経1部<br>金光明経1部<br>十輪経1部<br>弥勒経1部<br>理趣経1部<br>素戔経1部 | 勝宝4. 8. 7<br>勝宝5. 12. 10           | 12:342-346<br>=12:347-350<br>13:42-44          | 造東寺司解案<br>(用度申請)<br>(上の案文)<br>写書所解(布施申請)                   | 布 同上<br>布 同上   |
| 六十花嚴経   | 勝宝4. 8. 27                         | 12:355   | 装清能登忍人手実<br>(唯一の手懸かり)                                      | 布 書き込み   |
| 法花経16部128巻<br>無量寿経16巻   | ?                                  | 12:33-34                                       | 写書所解案(布施申請)  | 布 同上   |
| 仁王経32部64巻   | 勝宝5. 5. 9                          | 12:565   | 写経所解案(布施申請)  | 布 (同上)   |
| 八十花嚴経1部80巻  | 勝宝5. 10. 2                         | 3:632-634                                      | 写書所解(布施申請)   | 布 同上   |
| 六十花嚴経90巻?   | 勝宝5. 12                            | 3:638-640                                      | 写書所解(布施申請)   | 布 同上   |
| 大般若経1部600巻<br>六十花嚴経1部60巻<br>八十花嚴経1部80巻                        | 勝宝6. 2. 18                         | 13:50-57                                       | 造東寺司解(用度申請)  | 布 同上(但し、題師100巻1端)  |
| 花嚴経10部<br>5部六十花嚴経<br>5部八十花嚴経                                  | 勝宝6. 11. 12                        | 13:113-114                                     | (首欠)?  | 布 (同上) (但し、膚布の段数で書き込み修正)                                     |
| cf. 八十花嚴経10部800巻  | ?                                  | 12:192<br>12:272                               | 経疏師校生装清等<br>布施目録帳<br>造東大寺司写経用度<br>申請解案                     | 銭 同上<br>布 同上(但し、題師100巻1端)                                    |

〔E〕 天平宝字年間写経

| 経典名   | 年月日   | 所在  | 史料名   | 換算率  |
|---|---|---|---|--|
| 心経100巻  | 欠(勝宝9.6)  | 13:223  | 写書所心経布施注文   | 布  |
| 金剛般若経<br>十千巻<br>素心経<br>新撰素心経<br>(計2400巻)        | 宝字2.9.5   | 4:301<br><br>=14:28<br><br>14:184   | 東寺写経所解(布施申請)<br><br>同文案修正<br><br>(上の案文の歴名断簡)  | 布 1端あたり<br>経生40張 校生1000張<br>装清生400張 願師100巻<br>＜以下この換算法を《甲》とする＞<br>歴名各人の支給額を准銭し、縮・縛<br>等の単位量額で埋めていき、残った半<br>端額は銭で支給、というように書き込<br>み修正されている。<br>cf. 14:28から落ちたものではない。 |
| 方広経3巻 *   | 欠(宝字2.10)   | 14:197<br>14:198<br>14:199  | 写方広経経師等布施注文<br>経所雜物見注文<br>経所雜物見注文   | 銭 「玄蕃助石川弟人の個人的依頼」<br>銭<br>銭  |
| 知識大般若経  | 宝字2.11.3,9<br>宝字2.11.2  | 14:201<br>14:222<br>14:224  | 東大寺写経所間銭下帳<br>装清石田部足手実<br>人々大般若経  | 銭 装清校生料 経生料<br>布の書き込み<br>経生14人・校生・装清一銭<br>経生3人一布   |
| 金剛般若経1200巻                                      | 宝字2.11.3  | 14:226  | 東寺写経所解案(布施申請)   | 布 《甲》<br>但し1端に満たない部分につい<br>ては銭に換算した書き込み  |
| 仏頂経1巻 *   | 宝字4.3.9   | 4:411   | 造南寺所解   | 銭 「東大寺南朱雀路壇平為基鬼堂」  |
| 最勝王経<br>宝皇陀羅尼経<br>仏頂尊勝陀羅尼経                      | 宝字4.3.14  | 14:369  | 写経所解(浄衣・布施申請)   | 布 経師40張1端 校生1張4分<br>装清1張1寸 願師1巻4寸<br>＜以下この換算法を《乙》とする＞  |
| 法花経<br>理趣経<br>金剛般若経<br>計135部450巻                | 宝字4.3.20  | 14:372  | 造東寺司布施奉請文案  | 布 《甲》  |
| 法花経1部8巻   | 宝字4.4.26  | 14:385  | 経所解案(布施申請)  | 布 《乙》  |
| 灌頂経<br>梵網経                                      | 宝字4.4.2   | 14:387  | 写経所解案(用度申請)   | 布 《乙》  |
| 称讃浄土経   | 宝字4.7.11  | 14:409  | 東寺写経所解案(布施申請)   | 布 《甲》  |
| 陀羅尼経<br>隨求陀羅尼経<br>大仏師陀羅尼経                       | 宝字4.10.19   | 4:441   | 東大寺写経所布施奉請状   | 布 《乙》  |
| 坤宮御願一切経   | 宝字4.2-11<br>宝字5.1.25<br><br>宝字5.1.25<br>宝字5.2.13<br>宝字5.3.20<br>欠<br>欠(宝字5.4頃)<br>cf. 欠 | 14:310<br>4:490<br><br>15:91<br>15:11<br>15:40<br>5:63<br>15:103<br>15:97 | 校生・装清手実帳<br>奉写一切経所解(布施申請)<br>(12/30以前)<br><br>(首欠) 〃 (2/9以前)<br>〃 (2/9以前)<br>〃<br>奉写忌日御書会<br>一切経所解案(用度申請)<br>(首欠) 奉写一切経所解案<br>(一切経5330巻布施申請解)<br>写一切経所解案<br>93巻一切経内疏<br>16巻外写 | 布 書き込み<br>布 《甲》<br>但し、経師のうち注は30張1端<br>布 同上<br>布 同上<br>布 同上<br>布 同上<br>布 銭  |
| 大般若経2部1200巻                                     | 宝字6.12.16   | 16:59   | 奉写二部大般若経用度解案  | 布 《甲》  |
| 灌頂経   | 宝字6.4.12.21   | 16:172  | 奉写灌頂経所解案  | 布 《甲》  |
| 法花経2部16巻  | 宝字7.2.25<br>宝字7.2.26-   | 5:388<br>16:336   | 奉写経所解(用度申請)<br>奉写二部法花経経所雜物新帳  | 布 布 《乙》  |
| 最勝王経<br>宝皇陀羅尼経<br>七仏所說神呪経<br>金剛般若経<br>計615部732巻 | 宝字7.3.11<br>宝字7.4-6   | 5:403<br>16:387   | 造東大寺司解(用度)<br>七百巻経校帳  | 布 《甲》<br>布の書き込み  |
| 仁王経疏  | 宝字7.1.15<br>宝字7.2.9<br>欠  | 16:320<br>16:321<br>16:429  | 仁王経疏本充帳<br>(布施注文)<br>奉写仁王経経師等解文   | 経師、布の書き込み )<br>校生・装清生、布<br>綿の屯数の書き込み←  |

